

仇娘好八丈

から然う爲たが……おつねの畜生どお奉行と怪しいヤ私  
通いてるよ違へねエ たき馬鹿お言を云ひであい和郎  
が間拔けたからだ早く白子屋へ住ッ 謝罪て此公事を下  
げてお貰らひ……オヤ小僧どんお入出なさいませ 小僧  
旦那宅へ歸ッて大變よ怒ッてるヨ善八の日本一の馬鹿  
だ世界中の馬鹿を一人で背負て重たがらねへ一言も云ふ  
事を云はねへッて大變怒ッてるヨ早く呼んで来いてエか  
ら一緒よお出 善「アイ……」 噂アどん何んぼ何んでも素面  
ぢやア歩行けねへから手拭を冠せて呉んナ たき「サア……」  
手錠は喰つて頬ッ冠りを爲た面アは覺飴細工の瓢突子見  
たやうな面ア爲ておると女房よまで説謗られ小僧と一緒  
よ加賀屋さんの裏口まで参り 善「小僧どんチヨイと俺の  
頬ッ冠りを脱てお呉れお手錠で手が自由よあらねへから

仇娘好八丈

小僧問「抜けたかア飴細工の瓢突子見たやうな面ア爲て  
おやアがる 善「小僧メ彼ンな事を言やアがる……」 へエ且  
那長「サア善八此方へ出ねへもッ」と此方へ出なヨ 善「へ  
、誠よ今日はは苦勞さまで……」 長「本統よ和郎の問拔  
けな男だおア奈是一言云はねエ 善「へエ何でも白子屋へ  
謝罪て此公事を下げて貰ふ積りで手錠ぢやア車力が出来  
ません俺が稼があければ米味噌油炭薪を買ふ事が出来  
ませんから 長「馬鹿を云へ何んでも再吟味を願はさけれ  
ばあらねへが其方の云ふ言を云はねへばッかりよ斯う成  
て仕舞たのだ乃公が恐れあがらと云ふ途端よお奉行さま  
が立と仰しやッたから押切ッて云へバ乃公も假半の免  
郎の途中で怪しい事が有たよ違ひさい三百兩の金を持って

仇娘好八丈

亡命を爲たど云ふのいふつねの拵へ事だ悪い奴だから再  
 吟味を待つんだ宜いか 善夫れだつて旦那手錠で稼業  
 が出来ません喰はずよの居られません 長イヤ夫れよ助  
 才のねへ宅へ歸つて見る米が白米で一斗遣て有る夫れよ  
 味附から醬油から薪から残らず遣て有るまた桑名屋の旦那  
 那も見ておやア爲ねへ其方の又四郎の一條で手錠よ成て  
 却つて工面が宜くなるぞサア小遣ひを一兩遣るから之を  
 遣つて居ろ無く成たら喫アでも其方でも宜いから貰ひよ  
 来い喰ひ物が有て小遣ひが有たら手錠でも再吟味が待て  
 るだらう 善「是れの有難う坐います喰ひ物が有て小遣  
 さへ有れば生涯手錠を喰て、も宜い 長馬鹿を言を云ふ  
 ナ此方が堪るものか……コレ其方の奈是彼の事を一言も  
 云はねへ當年五月二十八日兩國川開きの晩下女のお菊と

仇娘好八丈

又四郎と拵へ情死の一條を服部小五郎さまへ下女が寐惚  
 けたやうな書面が上つて有るが事實の拵へ情死た奈是彼  
 れを上げねへんだ 善「違へねへ」口惜しい直ぐ是か  
 らは番所へ往て…… 長馬鹿ア云ふナ今此方から出られ  
 るものか」と其處で善八の喰物と小遣ひと貰つて我家へ歸  
 りました桑名屋の方からも貰いで呉れますから善八の結  
 句手錠の方が樂では座い升けれども身軀が樂で手錠を喰  
 て居りますので貰いで貰ひますのの心苦しい落語家でも  
 車夫でも自分が稼いで喰るのは鯛の鹽焼でも美味いが他  
 人よ奢られるの何らも美味くさい美味よの違ひさいが  
 夫れ丈けの遠慮が有りますさて善八の十日經過ても十五  
 日經過ても何んの沙汰も座いませんが手錠を改める時  
 又役人へ幾許か握らせただので緩い手錠を飲て貰ひましか

仇 娘 好 八 丈

ら左へ引ッ掛け右の手を抜いて使へる是の上の慈悲では  
座いますさて待てども、再吟味が座いませぬ、善エ  
オイおたきや困ッたナ何う爲たんだらう、たき和郎一ツ  
占いを見てお賞ひナ、善然うだナ那處かよ上手な賣ト者  
が有るか知ら、たき和郎さん芝の金杉よ天狗龍山と云ふ  
賣ト者が有ッて一日よ百人しきやア見おいと云ふが彼處  
へ往て見てお賞ひナ願ひ下げの方宜いか下げおい方が  
宜いかトてお賞ひナ、善ぢやア然う爲やうと財布を懐へ  
入れて賞ひ手銃をも懐へ匿して葺屋町から芝金杉の天狗  
龍山の處へ往くと善八の八十五番の札を取りました丁度  
日の申刻時分の事では坐います表でワア、と人聲が  
致しますので待て居た人が五六人天狗龍山の門の外へ出  
て見て居りますと亂心者で兒童が五六人長竿を持つて追

仇 娘 好 八 丈

ッ驅け廻し石を打附ける、と騒いで居り升亂心者の素  
裸体で身体に疵だらけ又成り狂ッて居り升の善八がア  
、氣の毒あものだと云ひあがら立て見て居ると其の亂心  
者が善八の傍へ飛んで参りましたから、喰ひ附れてハ大變  
だ、此方へ避けあがら其の横顔を見ると又四郎では坐い  
ますから驚愕り爲ました是の喜次郎長四郎忠八の三人で  
打殺したが生憎道中差と忘れて参りましたから止めを刺  
さんで羽根田の沖へ投げ込みましたが浪で打揚られ漁夫  
が見て介抱して氣が附いた事と見え、善八の又四郎が  
發狂して彼方此方を狂ッて歩きます所へ出會ひました  
から最うトを見て賞ふよも及びませぬ、設令狂氣でも存命  
で居りましての上を偽わるよ當りますから手銃でハ濟み  
ません、入牢ハ決定では坐います馬鹿でも其の位な事ハ知

丈 八 好 娘 仇

て居りますから是から發狂人を跡の附いて歩行き兒童等  
が石を打つけやうとするを 善コレヤイ悪事を爲やアが  
ッてと兒童を叱ります斯やう又善八が制しますから宜い  
鹽梅よ端の兒童が離れましたが發狂人だから取留まりが  
無く白銀盛町へ來ますと何か考へながら小便をして居り  
ますから善八が傍へ寄つて袖を曳き 善又四郎さんくしと  
いふと物をも云はず突然り飛び揚つて驅出し又た彼方此  
方を歩行いて居る中又日が暮れて高輪の奥の牛車の間へ  
這入つてバタリと倒れてグウク 高野を掻いて寐て仕舞ひ  
ましたスルと傍へ昇夫が居て 昇夫へエ駕籠で如何で御  
座へ升 善オイ駕籠屋 昇夫へエ、何んでげす 善お願  
ひだが大丸新道まで昇てお呉れナ 昇へエ尊公さまで  
善ウンコヤ此牛車の間へ寐て居る此人を乗せて何うか昇

丈 八 好 娘 仇

てお呉れナ 昇夫へ、是の往けやせん發狂人あんで  
善ナせ往けねへのだ 昇夫是の二三日己前大森の方から  
狂つて來たので其の時よの着物も着脚絆も穿いて居たが  
今の奪られて仕舞たやうでげすが大方宿無し所の業では  
座エやせう 善さうですか……是の俺の身内だが駕籠賃  
を與たら宜らうから何よか昇てお呉れナ 昇夫左様でげ  
すか……何うだ相棒然うよナア何うせ閉だから發狂人で  
も錢にせへありやア宜いちやアねへか……且那遣りませ  
う 善然んなら直ぐ籠駕を持って來てお呉れ 甲へエ  
……何しろ發狂人だから此儘駕籠へ乗ると轉がり落ちや  
すから細で纏縛つて往きますから錢を入文下せへまじと  
是から細を買つて來て邪慳又駕籠を縛りましたが又四郎の  
夢中で克く寐て居ります之を駕籠へ乗せ落ちないやうよ

繩を繋いでグルグル御籠を巻いて 甲「オ、蠟燭を買って來  
 ねへ 善「昇夫さんお願ひだから無提灯で昇てお呉れ 甲「  
 へエ………でがすか無提灯でハ 善「其蠟燭を照けない賃を  
 別よ進げるヨ 乙「へ、面白いな今まで蠟燭代てエのハ度  
 々賞ったが蠟燭を點けねへ賃を賞ふのハ面白へ………へエ  
 遣りますと是から善八が駕籠傍へ附いて大丸新道の桑名  
 屋彌物左衛門の外妾の宅へ参りますと恰と彌物左衛門さ  
 んの外妾のお酌でお酒が始まつて居ります彼是夜の酉刻  
 前で御座います駕籠を戶外へ御させて善八がトン／＼と  
 と格子戸を叩き 善「お頼み申す／＼ 彌「ハイ………コレ  
 く たけや能く誰かだか聞いて開けナ 竹「ハイ………誰公  
 エ誰公エ 善「へエ車力の善八で御座います 竹「オヤ………  
 アノ旦那さま車力の善八ださうで御座います 彌「ム、ハ

仇娘好八丈

然うか可愛想ふ彼の男ハ又四郎の一條で手錠も成て居る  
 が氣の毒千萬な………開けて遣んナ 竹「ハイと下女が雨戸  
 の格子を開けると輕輿が一挺家の前へ御して有ります  
 善「エ、旦那さまが居らっしゃいますなら一寸何うかお目  
 通りを致し度う御座います 竹「ハイ………善八が旦那さま  
 よお目通りが爲たいと申す 彌「ウン然うか………イヤ善  
 八さア此方へお上り………何だエ 善「エ、外でのありませ  
 んが又四郎さんを連れて参りました 彌「エ………ナニか又  
 四郎が居たのか 善「へエ今日その占者へ又四郎さんの事  
 で見ても賞ひまじき升と斯やうく御座いまして若お  
 上の手へ這入りますと俺の手錠でハ濟みません入牢も成  
 りますから何うか何分御願ひ申升 惣「ム、ハ然うか………  
 夫れぢやア昇夫其格子を外して駕籠ぐるみ此方へ入れて

仇娘好八丈

仇 娘 好 八 丈

呉れと是から昇夫を頼んで雨戸や格子を取外し輕輿のま  
座敷へ擔ぎ上げ臺所から薄縁を持って参り其處へ敷き  
籠から又四郎を出して見て旦那さまの胸が痞塞よ成りま  
また善旦那此人が又四郎さまで彌、！……お島や  
何うだ此者の阿父さんの代から勤めて居た謹直い又四郎  
だが止せと云ふのを無理よ白子屋へ養子よ往て此様な難  
又逢ったア、惘然よ……昇旦那さま夫れで宜しけれバ  
歸へり度う御座へますから何うか駕籠賃と願ひ度もんで  
彌、ナニか幾らで極めて来たエ善まだ極めてません彌  
昇夫さん駕籠賃の幾らだエ昇へエ些とあ高うがせうが  
二朱と六百よ蠟燭を點けねへ賃を二百へ、誠よあ氣の  
毒さまでげすが彌ア宜しく……お島や金を二分包み  
ナ……昇夫さん此處よ二分有る一分の駕籠賃一分の酒代

仇 娘 好 八 丈

たヨ 甲「へ、コレは何うも有難う存じます……相棒ッ  
レ見ねへ近年の發狂人よ限らア……有難う存じます……  
エ、何うで御座へませう廉く負けて置きますが斯う云ふ  
お客が最う五六人……彌然んなまの無いが少し仔細有  
て此亂心者を當家よ置けない東海道戸塚驛まで送り届け  
あければならねへが予の宅の出入りの駕籠屋の三軒も五  
軒も有るけれど壁よ耳が有ッて此事が風聞よ成りますか  
ら迎もの序よ和郎方是を東海道戸塚まで送り届けて呉  
れまいか昇へエ有難うの伊坐へやすが仲間中で旅へ出  
しますのハ八釜敷ややすから彌、けれど予の毎年伊香  
保や箱根へ湯治よ往たりする時よハ江戸から通し籠駕で  
往ても別よ八釜敷云んが何うだエ仲間の義務も有るだ  
らうけれども道程の十里しきやア無いが一人前一兩二分

仇 娘 好 八 丈

進げやう二日か三日か  
泊料其他道中の雑用の残らす此方で持つが何うだエ二日  
一ト晩泊りで翌日歸られて三兩よある仕事だが何うだエ  
甲「へエく一日一兩二分よ成れば遣りませうくへエ  
旦那お伴と致しませうなら其割合で長崎までも彌  
ハ、ハ、然んかよ遠方へ遣られて困る昇「へエ……夫れ  
なれば譯きやア御座へやせん彌何うだエ酒を喫るかエ  
昇「ナニ飲むてエほと飲みませんホンの浴るので彌浴  
るのり結構だ跡を閉めてお呉れ」と是から熱燗で酒を飲ま  
せ乃で彌惣左衛門さんが店の若い者を二人呼びに遣て  
彌「石町の寅刻を聞いてから起てお呉れ其積りで今夜の  
明「した何よししろ又四郎の散髪でい遣られません阿兄の  
結「纏屋五郎兵衛の戸塚に旅籠屋を爲て居ますから齒の形

仇 娘 好 八 丈

を拵へ襦袢から拾其上へ羽織を着せて呉れました其申  
石町の寅刻を報ましたから昇夫を起して準備よか、ると  
昇夫が突然り又四郎の手足を縛りよ掛るを見て彌何う  
か止してお呉れ此者の予の阿父さんの代から使った奉公  
人で然んなよ荒縄で縛るのを見て居ると予の胸が否塞よ  
成て堪らんから何か縛らんで昇つてお呉れ夫「へエく  
……荒縄の替りよ麻縄が有りませうか彌「身体丈の下締  
で結ひてお呉れと是から身体を下締で結ひて駕籠へ乗せ  
垂れを卸し麻縄で駕籠をぐるゝ悉いて善八の手錠で自  
由よの出られませんから市兵衛よ文吉と云ふ二人の若い  
者よ手紙を持たして丁度寅刻時分から大丸新道を出まし  
て江戸橋から通町へ掛り芝大門田町九丁目を打越して高  
輪十八町丁度品川の問屋場の前へ掛るとスツカリ夜が明

仇 娘 好 入 丈

けちまひした狂気の發するの暮方と明方と限ッてぬ  
ますスルと品川又宜い捕物が有りました事か大岡越前守  
さま手附きの同心衆八人又御用利が十四五人間屋場の向  
ふ前に固めて居ります所へ擔ぎ込んだ又四郎が駕籠の中  
で又「ウン」と云ひながら暴れて線香烟花のやうな手足  
を出して駕籠が傾斜になりました甲だから乃公が行け  
ねへと云たんだと云て居る處へは用利が参り用利昇夫  
其駕籠を御せと云ひあがら棒端を捕まへる途端よ又き  
やツと叫びながら駕籠の外へ半身轉がり出したのを見て  
驚愕り致して跡へ飛び退き用利「何んだ」此者の…  
大層手足が疵だらけだが何んだ昇夫是れ何處へ遣る駕  
籠だ昇へエ東海道戸塚へ遣ります駕籠で實は旅の不可  
いと申ましたらお客さまが然うでも有らうがコレくだ

仇 娘 好 入 丈

から遣て呉れと何んなさいますので據なく何んしました  
俺の方の何んですから何んしましたので用利何を云ッ  
て居るのだ昇へエ左様で用利然らば此の者の東海道  
戸塚の者か昇へエ左様で御座います用利那處から出  
た駕籠だ昇へエ是れの大丸新道から参りましたのでへ  
エ用利コレ兩人其處又踞んで居るが汝等の何だ文  
へエ私の大傳馬町桑名屋彌惣左衛門店の若い者文吉と申  
ます市私市兵衛と申します用利垂れを揚げるく  
日昇へエと仕方がないから麻繩を取り外し紐を解  
き垂れを揚げるを旦那方が何う云ふ姿の奴かと頭を入れ  
る途端よ高聲で又蝶々蜻蛉やきりくす旦那何んだ  
ア、一驚いた……コレヤイ是れ亂心者ぢやアあいか……  
發狂人であるいか市左様で御座います旦那、一月



塚の何んとヤす家へ往くのだ 市へエ桔梗屋と云ふ旅籠  
屋へ此者を送ッて参りますので 旦那是の彌惣左衛門の  
何んだ 市へエ番頭で坐います 三番番頭の又四郎さん  
と仰しやいますと云ふと此方又四郎の行衛  
を探索致して居ります所だから各自懐中よ人相書を持って  
居りますので今手代共から又四郎と聞きまして懐中から  
帳面を取出して見較べ 旦那コレやイ此又四郎と云ふも  
の新材木町の白子屋方へ養子よ参ッた又四郎でない  
か 市左様で坐います 旦那夫れならば此駕籠を戸塚  
へ遣る事相成らん此者が居あければ再吟味が出来んの  
で疵より探して居たのだから此駕籠を直ぐ又南の番所  
へ引ッ返せと是から又四郎の駕籠を南の番所へ引ッ返し  
ました

さて南の番所へ又四郎の引ッ返されましたが發狂人ゆ  
ゑ吟味もお調べも出来ません 白洲へ出ましても薄縁の  
上に坐ッて鼻歌を唄ッて居り升から逆も調べる譯ない参  
りません スルト此處に阿部友之進と云ふ名醫が有りませ  
此仁は奇体不思議な醫者で其跡が近頃まで魚河岸よ殘ッ  
て居たさうで坐い升此の友之進と云ふ仁の信州高遠の  
出で居坐いましたして親も醫者で坐いましたたが友之進の  
一度江戸へ出て一旗擧げやうと思ひましたたが中々然らん  
往きません 知已も坐いません所から馬喰町の荳屋を  
宿よ取居ましたたが終に借財が出来ましたので何うす  
る事も出来ませんから據るなく夜分よ成り升と笛を吹い  
て按摩を爲て歩行き小遣を取居たと云ふ事で友之進が

第十一回

或晩酉刻時分、富澤町の富田屋さんの門口を笛を吹いて  
 通りますのを小僧さんが聞き附て、小僧「隠居さんく  
 隠何んだ、小僧「表を笛を吹いて通りますが尊公の肩の  
 按摩の方で評判が悪うござい、升富田屋の隠居の肩へ捕ま  
 ると板見たやうで按摩殺しだつて過般按摩が尊公の喉を  
 爲てぬましたが今笛を吹いて通るの、尊公を知らぬ、接  
 摩ですから呼び込んでいじめてお遣んさい、隠「ハ、ハ、  
 然うだな、小僧「大概あものは小便が爲てエと云て療治代  
 も取らぬへで逃げ出します、今夜の逃げ出したら俺が  
 ドッコイと捕へて遣りませう、隠「ウン面白く呼びナ、  
 小僧「へエ……按摩さんく……此方だヨ、友「那方でげ  
 す、小僧「此方く……サア此方へお遣入り、友「ハイ……  
 有難う存じます、小僧「イヤ、目明だ……隠居さん按摩

の癖、目明きですヨ、隠「盲目であければ按摩をするおと  
 云ふお布令の出さぬワ……按摩堪忍して呉れ小僧だから  
 悪まれ口ばかり利いて困る、友「イエ何う致しまして……  
 エ、お療治の誰公さまで、隠「ア、予だヨ併し随分難物の  
 肩だからしつかり揉てお呉れヨ、大抵の按摩の皆途中で逃  
 げるが按摩さん逃げやうたつて逃がさないヨ、友「何う致  
 しまして療治又掛つて逃げる、云ふ法は坐いません……  
 ……ドレ、お治療を爲て見ませうと是から隠居さんの肩  
 よつかまり、友「成程是の大抵の按摩の揉みほごせませ  
 まい、予の此位の肩の驚きませんと云ひあがら段々揉  
 み解して参ります、隠「ウン……中々……是の可驚い何う  
 も可感いや……小僧「御隠居さん神田須田町の伊勢屋さ  
 んからお使者で坐います、隠「ム、然うか此方へ呼びナ

仇 娘 好 八 丈

……按摩さん少し待てお呉れ……摸樣は何うだエ六ヶ敷  
いかエ使へエ何うか侈隠居さま直ぐお入來を願ひま  
すお來臨まで保てバ宜しいが多分六ヶ敷いと斯う仰しや  
い升た 隠然かちやア予の直又往く……按摩さん療治代  
を貰って往てお呉れ夫から二三日中又來てお呉れるら  
い按摩さんだ 友失禮ですがお使の何では坐い升 隠  
何にノ予の孫だが……神田須田町の伊勢屋と云ふ氷菓子  
屋の予の悴で其處の今年七才又成る娘たが疱瘡だといふ  
が本統よ醫者よも見限が附ねへと見えるんだが六ヶ敷い  
と云ので一人ツ子だから落胆り爲て居るのサ 友へ、  
私よ何うか其嬢ちやんの容体を診せて下さいますま  
いか 隠和郎の按摩でいあいか 友イエ實の私信州高  
遠のもので坐いますすが江戸へ出て一旗擧げやうと存じ

仇 娘 好 八 丈

ましたが江戸の情けない所で盲目千人盲目千人で坐い  
ます醫者の打扮が悪いと下手だと思つて居やすが衣裳よ  
係るので有ましまし江戶の人の情けない向うか私しよ  
見せて下さいまし醫の仁術と申すから錢金よ轉ぶの法  
では坐いません人助け又爲たうは坐います疱瘡なれば山  
を揚げれば夫れで宜ろしいのだから何うか私よお見せお  
すつて 隠ちやア予と一緒に往てお呉れと富田屋の隠居  
が右の按摩を連れて参りますと一人ツ子の事だから阿母  
さんの落胆り爲て居ります 隠何うだエ容子の事これ  
のお祖父さん能くは出下さいました何うか出來ますまい  
か未だ此通りでは坐います 隠ア……音兵衛さん  
然うやけ酒ばかり飲んで居ちやア身体が悪くあるヨ今  
日コレくで不思議お按摩さんを連れて來たが疱瘡あら

仇 娘 好 八 丈

山を揚げれば宜からうと云ふが何うだエ見せる氣の無い  
かエ 吉按摩でも宿無しでも宜しいから見せて下さいま  
し「と一人の子の事だから助け度は至當で坐います 隠  
ちやア何うか按摩さん此兒を診て下さい 友「畏まりました  
た……サア然う遠てお居でなさい宜しいく云ひなが  
ら暫く手を取り脈を診て 友「ム、ウ……是の可愛想も胸  
が板のやうに張詰て居ます……何うか赤い紙を一枚下さ  
いまし」と是から赤い紙を取寄せ紙捻よして油を附け其先  
へ火を點けて残らず他の火燈を消し紙捻よし點けた火光で  
解りまして見ました斯うすると肉と皮の間よ出來て居るのが  
江戸無ッたから無益も其頃ろ疱瘡の山を揚げる醫者の  
頃種痘法と云ふ器用な事が有りますから疱瘡で死ぬ人

仇 娘 好 八 丈

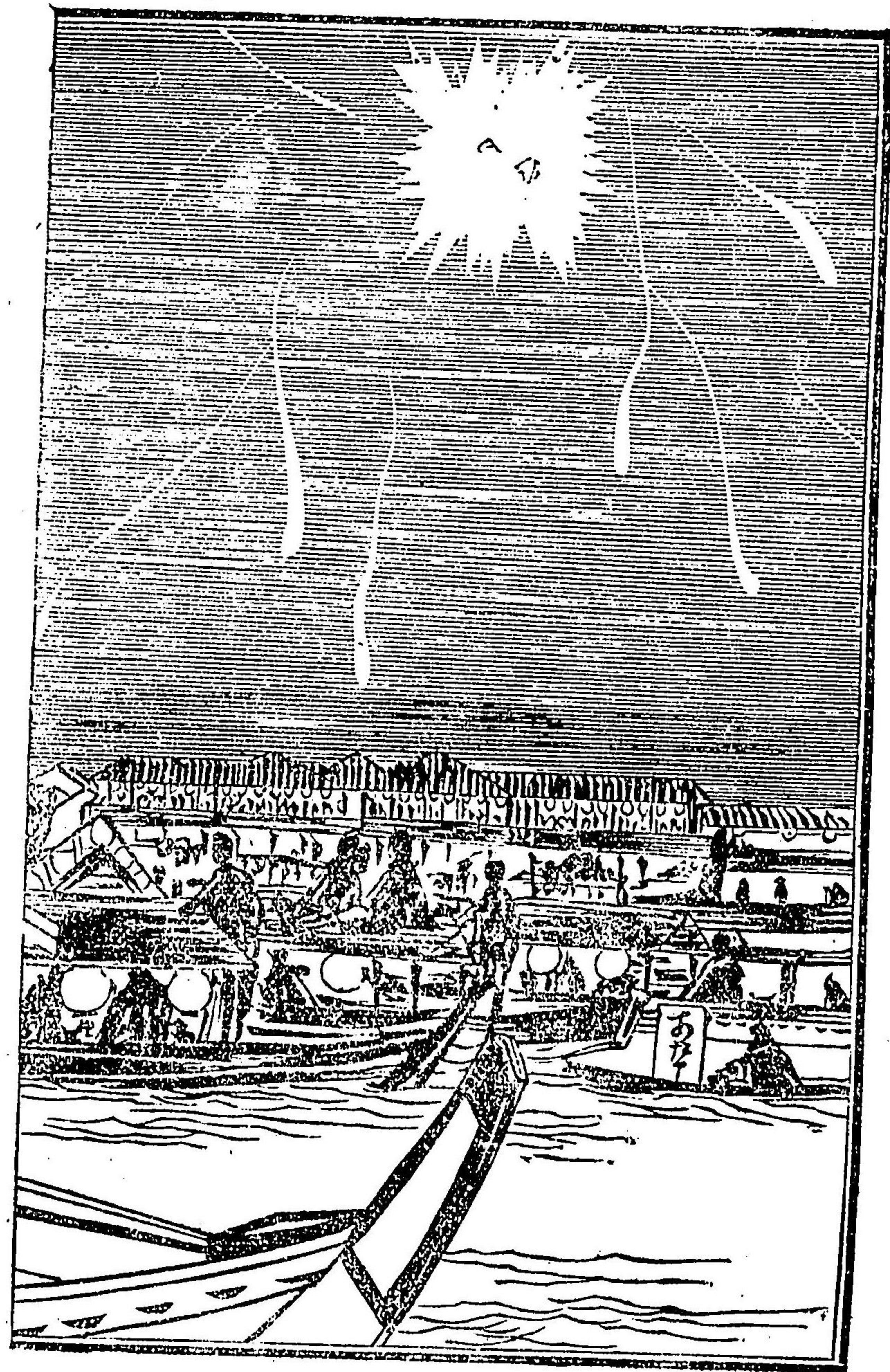
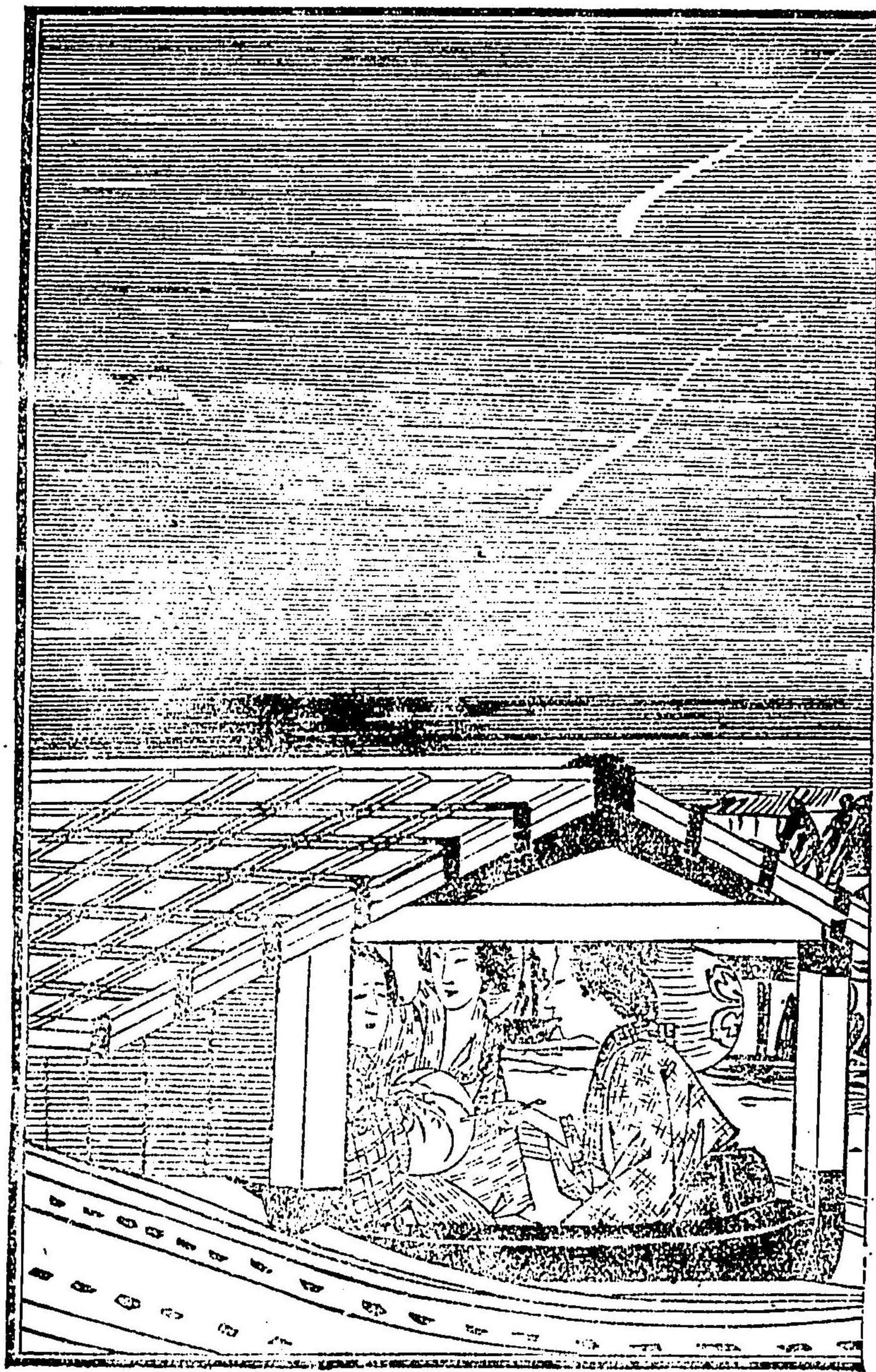
のありません今友之進の能く手と足や何かを見して 友  
此兒の壽命が有ります今夜私が來ないと必らず明方よ命  
が無くある所だッたしかし燃えて居る火よ水を撒るやう  
なものだから安心なさいまし……アノ葛根湯を買ひに  
遣ッて下さい 醫胃寒ぢやア御座いませんせ葛根湯が疱  
瘡よ利きますすか 友「イヤ兒童よ熱の有る時ハ疱瘡でも癩  
疹でも葛根湯を飲まして置けば間違ひないから早く買ひ  
よ 遣んかさい……夫れを湯呑よ水を一杯半入れたのを一  
杯よ煎じ詰めて……去からか宅よ足の黄色い鶏が居りま  
すか 吉「幸はひ足の黄色い鶏が居ります 友「ア、夫れ  
の丁度宜しい夫れと木綿針を二本と奉書の紙をケハ立つ  
程綿のやうに能く揉んで下さい夫れよ何か大きな湯呑よ  
一杯薬罐よ水から能く沸騰して下さい」と是丈けの詠へて

仇 娘 好 八 丈

は坐いますから時又附いて居た鶏を持て参り火鉢に  
て能く毛を暖め鶏冠を能く甜て木綿針を持てチヨイ  
鶏冠を突附いて血の直接も取れませんかから血の流  
を奉書紙で一旦取りまして之れをグラク沸騰して居  
湯の中へ浸して置きまして紙へ取つた血が湯へ取れ  
ゆゑ之を冷して置いて瘡着ッ子口の結び歯を咬み  
て居ますから口を開けて前に奉書紙を取つた鶏冠の  
を吹ッ込んで廻りますと喉へゴツン通る其跡へ葛  
根湯を飲ませて友是で多分明方よ此兒の山を揚げ  
せう就て今夜の當家へ私を泊めて下さいまし 吉何  
か願ひますと兒童を助けたいから親子の勿論隠居も共  
頼みましたスルト明方に成ると口が聴け山を揚けて  
治療を盡しましたからトウく按摩さんが伊勢屋さんよ

仇 娘 好 八 丈

居た爲め此瘡瘡の療治を爲通しまして七才も成る娘を  
貰つたやうな事です是は鶏冠と云ふ療治の仕方だう  
で珍坐い升何しろ友之進の身装が惡いから古着屋さんか  
ら帯羽織着物まで買ひ整へて金で添へて之を友之進  
を返した友之進の此處で大豆屋の拂ひを済ませて荷  
を取返しましたた吉尊公のやうな醫者が江戸にお  
おれば多くの小兒が助かり升と幸ひ神田區町にお  
賣家が有りましたから之れを買つて給與ふと是れから阿部  
友之進の名義で玄關を開き高遠から女房を呼び寄せ下  
を一人使つて居り升瘡瘡と云つて大變な流行した  
此仁の瘡瘡ばかりで無く万病とも功者でげす不思議  
よの工面の宜い人が係ると藥禮を許多と取て貧乏人が係  
ると藥禮を取りません我々落語家あそばは正直ですから藥



仇娘好八丈

禮を持って参り ○「へエお影さまで昨晚出ました 友「然う  
かへうれの結構だ何んでも夜更けて物を喰なさんなヨお  
座敷へ呼ばれて無錢だと思つて無間喰ふと身体の爲め  
よあらないよ ○「へエ有難う存じ升……甚だ輕少では坐  
いますか何うかと藥禮を出すよ 友「何んだ是の何んだ  
○「へ、藥禮で 友「落語家から藥禮を取るやうな醫者で  
のあい持て歸つて米でも買ふが宜い病氣が全癒して有難い  
と思つたら火事でもあつた時よの儲きよ淡い薬人で力  
無からうが符でも何んでも儲き出すが宜い……大層帯が  
破綻んだナ……一分遣るから是で帯を買へと持て行た藥  
禮を返された上又錢金か貰つて歸りました斯ういふお醫  
者の近頃のほ坐いません只脈を診て貰ふばかりで三圓だ  
の五圓だのと云ふのですから貧乏人の續り繁く成たかと

仇娘好八丈

思ひます貧乏人よの友之進のやうに爲て呉れあくつての  
往けません時、藥を袂へ入れて貧乏社會を開いて歩行き  
ます 友「何うだな病人のあいかな阿部友之進だ無いかな  
く 甲「へエ先生お宅へ出ますのでげすが何うか診見廻  
りを願ひ度う存じます 友「ウン何んだエ當人の 甲「へエ  
鼻アが大病で何うか先生願ひます 友「ア宜しく見廻ッ  
て遣らう 甲「へエ此方でげす……婆アや此名人のお醫者  
さまが入らしつたから氣丈り爲ろヨ……何卒此方へお上  
ンなすつて 友「病人の那處よ居る 甲「へエ障子の影よ寐  
て居ます 病人「先生お入來あさいまし 友「チ、其處か寐  
て居るく……ア、一奈是布團を敷いて抱衾を着せて遣  
らんのだ寒氣の取附きよ是れぢやア壯健のものでも堪ら  
ん奈是布團を敷いて遣らんのだ 甲「へ、寐道具の喰ッ

仇 娘 好 八 丈

ちまッては坐いません 賊よお氣の毒さまで 友「予よ氣の毒な事無病へ氣の毒だ……サア、手を出せく……ム……舌を出して見せあ……是ハ差したる病氣でもない 胃寒が少し重く成たのだから起れば起られるのだ 病人「妾も起き度うは坐います すが單物一枚で坐いますし 外間が悪くッて晝間小用も往かれませんから流して 小用を致して居りますので 友「ア……是ハ金病だ 稼業の何んだ 甲「大工でへエ 友「奈是仕事を爲ないのだ 甲「へ、道具箱がござせんから 友「道具箱の何爲たんだ 甲「へ、喰ッちまひましたへエ 友「何うも能く種んな物を喰ふな……内儀さん 和女着物の何うした 内「眞人が皆剥ちまひました 友「内儀さんを赤蕨だと思ッて居る 着物の幾らで道入居るのだ 内「綿入と半天で一兩一分で坐

仇 娘 好 八 丈

います 友「サア、予が一兩一分遣るから宜いか都合が 恢復たら日掛けよでも爲あヨまた貰いで遣るから……ッ ヲヨ一兩一分 内「成程上手あお醫者さまだ 友「馬鹿よ爲あさんあ……道具箱の幾らで出る 甲「へエ然う受けてお 貰ひ申しやしての 濟みやせんが 一兩二分有れば仕事が出 来やすのでへエ 友「一兩二分加利分を一朱添へて遣るか ら此金で仕事を爲し 甲「へエ一有難う存じます 何うか序 又米櫃の脈を見て下さいませすやう願ひます 米櫃が大病 でげすから 友「ヤレ、夫の氣の毒あ 米櫃が肝腎だ併し 予ハ米櫃の診察をするの 今日が始めてだが何處だ 甲「へエ此櫃で 友「ム、一成程一粒もあいか 甲「エ何うも恐ろしく大病あんでげす 友「ム、一然あら此金で米を買へ成程兵糧が無くッてハ大變だ 此處よ二朱有るから此金



仇娘好八丈

で米を買ひナ 甲「エ、薪が一本も御座いません味噌汁を  
 吸はねへと烟草を喫ふ奴の毒だと聞いて居ますか味噌汁を  
 醬油菜漬も序よ 友「二朱も遣たら宜からう 甲「誠よ有難  
 う存じますす…… 友「また其内又見廻ッて遣るぞと斯う云  
 ふ鹽梅又彼方此方で助けられた仁の友之進よ會ふと先生  
 有難う伊座いませんと貧乏人の友之進を神か佛のやう云  
 て居ります今度の新川新堀の鹿島の旦那が大病だ彼家等  
 でげすから六七人の出入りの醫者も有りませうが残らず  
 見放した處から友之進へ頼み又参りましたから宜しいと  
 受合ひ診察致し薬を配劑まして家内のものに向ひ 友「旦那  
 那の病氣を癒すよ女の看病人の相成りません當家の主  
 人の腎が虚したのだ平生身体を樂よ爲て若い女を寵愛し  
 たから腎が虚したのぢや之を全癒しての進るが其代り薬

仇娘好八丈

禮が高いヨ 番頭「へ何のやうお薬で 友「ナニ薬九層  
 倍と云ふが薬千層倍儲けるのだ斯う云ふ大家から餘計よ  
 貰ッて置かんと貧乏人を助けて遣る事が出来ないう依て  
 藥禮の高價ヨ 番頭「へ何の位で 友「三百兩だが宜し  
 いか 番頭「宜しう伊座い升 友「イヤ只宜しいと云ふか  
 りでん不可ん親類立合ひのうへ証文を貼ッしやいと云ふ  
 から此處で三百兩の証文を貼て頼みました友之進の療治  
 よ係ました所が一月経過あいな中ケロ 病氣全快し  
 たので彌々藥禮を爲やうとあると公事師が附て 公事師「  
 夫れ偽醫者又違ひない最初薬禮を極ると云ふ法いな  
 い訴へればは覽じろ一文も遣らずとも濟みますとは是から  
 南の御番所へ訴へましたから早速阿部友之進へお差紙で  
 友之進の白洲へ出ますと越前守さまが 越前守「其方の偽

丈 八 好 娘 仇

虚<sup>ま</sup>で有<sup>あ</sup>らう薬<sup>くすり</sup>禮<sup>れい</sup>を先<sup>ま</sup>に極<sup>きよく</sup>める方<sup>かた</sup>のい<sup>い</sup>で<sup>い</sup>ないか 友<sup>とも</sup>恐<sup>おそ</sup>  
れながら友<sup>とも</sup>之<sup>の</sup>進<sup>しん</sup>申<sup>ま</sup>上<sup>あ</sup>げます大<sup>たい</sup>家<sup>け</sup>より大<sup>たい</sup>金<sup>きん</sup>を賞<sup>あ</sup>ひませんで  
の貧<sup>ひん</sup>窮<sup>きゆう</sup>人<sup>にん</sup>を助<sup>たす</sup>ける事<sup>こと</sup>が出来<sup>でき</sup>ません予<sup>われ</sup>の貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>人<sup>にん</sup>へ無<sup>な</sup>代<sup>だい</sup>薬<sup>やく</sup>  
を飲<sup>の</sup>みて有<sup>あ</sup>りますまた資<sup>し</sup>本<sup>ぽん</sup>を遣<sup>ち</sup>て稼<sup>かせ</sup>業<sup>ぎやう</sup>をさせ遣<sup>ち</sup>ります  
若<sup>わ</sup>し多<sup>た</sup>疑<sup>ぎ</sup>念<sup>ねん</sup>が多<sup>た</sup>座<sup>ざ</sup>いますあらぬ聞<sup>き</sup>れし<sup>し</sup>のうへ鹿<sup>か</sup>島<sup>じま</sup>へ御<sup>ご</sup>理<sup>り</sup>  
解<sup>かい</sup>下<sup>くだ</sup>さいいまし若<sup>わ</sup>し三<sup>さん</sup>百<sup>ひゃく</sup>兩<sup>りやう</sup>遣<sup>ち</sup>さんと申<sup>ま</sup>すあ<sup>あ</sup>ら無<sup>な</sup>代<sup>だい</sup>薬<sup>やく</sup>を服<sup>くわく</sup>用<sup>よう</sup>  
せ<sup>せ</sup>て遣<sup>ち</sup>ります越<sup>こ</sup>前<sup>ぜん</sup>守<sup>しゅ</sup>、……今日<sup>こんにち</sup>の退<sup>たい</sup>れ追<sup>お</sup>て沙<sup>さ</sup>汰<sup>た</sup>又<sup>また</sup>  
及<sup>およ</sup>ぶと夫<sup>つま</sup>から取<sup>と</sup>調<sup>てう</sup>べて見<sup>み</sup>ると友<sup>とも</sup>之<sup>の</sup>進<sup>しん</sup>よ助<sup>たす</sup>けられ稼<sup>かせ</sup>業<sup>ぎやう</sup>に取<sup>と</sup>  
附<sup>つ</sup>いたものか幾<sup>いく</sup>らも有<sup>あ</sup>ります餘<sup>あま</sup>り珍<sup>めづ</sup>らしいから越<sup>こ</sup>前<sup>ぜん</sup>守<sup>しゅ</sup>さ  
まが鹿<sup>か</sup>島<sup>じま</sup>を呼<sup>よ</sup>び出<sup>だ</sup>して充<sup>ち</sup>分<sup>ぶん</sup>は理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>を加<sup>か</sup>へられましたから  
友<sup>とも</sup>之<sup>の</sup>進<sup>しん</sup>の三<sup>さん</sup>百<sup>ひゃく</sup>兩<sup>りやう</sup>の金<sup>かね</sup>を南<sup>なん</sup>の番<sup>ばん</sup>所<sup>じよ</sup>から賞<sup>あ</sup>つて歸<sup>かへ</sup>りました  
斯<sup>か</sup>ういふ評<sup>へい</sup>判<sup>はん</sup>の可<sup>か</sup>感<sup>かん</sup>い醫<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>で坐<sup>ま</sup>いますから此<sup>こ</sup>者<sup>れ</sup>へ差<sup>さ</sup>紙<sup>し</sup>  
で呼<sup>よ</sup>び出<sup>だ</sup>し又<sup>また</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>の容<sup>よう</sup>体<sup>たい</sup>を診<sup>しん</sup>察<sup>さつ</sup>させると 友<sup>とも</sup>是<sup>こ</sup>の腹<sup>はら</sup>胃<sup>い</sup>が

丈 八 好 娘 仇

顛<sup>てん</sup>倒<sup>たう</sup>つたので物<sup>もの</sup>よ驚<sup>おど</sup>ろき臟<sup>ぞう</sup>腑<sup>ふ</sup>が顛<sup>てん</sup>倒<sup>たう</sup>したので坐<sup>ま</sup>います  
から舊<sup>ふる</sup>の通<sup>と</sup>り又<sup>また</sup>致<sup>いた</sup>して遣<sup>ち</sup>れれば必<sup>かな</sup>らずとも亂<sup>らん</sup>心<sup>しん</sup>の治<sup>ち</sup>ります  
と云<sup>い</sup>ふ是<sup>こ</sup>れから南<sup>なん</sup>の番<sup>ばん</sup>所<sup>じよ</sup>へ通<sup>と</sup>ひまして十日<sup>じふにち</sup>ばかりで又<sup>また</sup>四<sup>し</sup>  
郎<sup>らう</sup>の病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>の悉<sup>しつ</sup>皆<sup>か</sup>り平<sup>へい</sup>癒<sup>い</sup>ましたから何<sup>なん</sup>れ上<sup>かみ</sup>から致<sup>いた</sup>して友<sup>とも</sup>之<sup>の</sup>  
進<sup>しん</sup>の處<sup>ところ</sup>ろへ薬<sup>やく</sup>禮<sup>れい</sup>が伊<sup>い</sup>座<sup>ざ</sup>いしましたらう是<sup>こ</sup>れ又<sup>また</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>を  
白<sup>しろ</sup>洲<sup>しゅう</sup>へ呼<sup>よ</sup>び出<sup>だ</sup>し越<sup>こ</sup>前<sup>ぜん</sup>さまが調<sup>てう</sup>べありました 又<sup>また</sup>恐<sup>おそ</sup>れ  
ながら又<sup>また</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>が上<sup>かみ</sup>げます夢<sup>ゆめ</sup>よ夢<sup>ゆめ</sup>を見<sup>み</sup>ましたやうあ心<sup>こころ</sup>持<sup>もち</sup>ち  
で座<sup>ざ</sup>いますすが借<sup>か</sup>か又<sup>また</sup>當<sup>あた</sup>り七月<sup>しちがつ</sup>の十日<sup>じふにち</sup>よ大<sup>たい</sup>山<sup>さん</sup>へ參<sup>まゐ</sup>詣<sup>ぎ</sup>又<sup>また</sup>出<sup>い</sup>立<sup>だつ</sup>  
いたしまして永<sup>なが</sup>く彼<sup>か</sup>方<sup>かた</sup>此<sup>こ</sup>方<sup>かた</sup>を遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>致<sup>いた</sup>して七月<sup>しちがつ</sup>の借<sup>か</sup>か二十  
八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>で座<sup>ざ</sup>います羽<sup>は</sup>根<sup>ね</sup>田<sup>だ</sup>の伯<sup>はく</sup>父<sup>ふ</sup>の許<sup>もと</sup>へ立<sup>た</sup>寄<sup>よ</sup>らうと存<sup>ぞん</sup>じま  
して暮<sup>く</sup>方<sup>かた</sup>又<sup>また</sup>大<sup>たい</sup>師<sup>し</sup>河<sup>か</sup>原<sup>げん</sup>へ參<sup>まゐ</sup>りまして羽<sup>は</sup>根<sup>ね</sup>田<sup>だ</sup>の渡<sup>わた</sup>しへ乘<sup>の</sup>りま  
す時<sup>とき</sup>よ旅<sup>りよ</sup>人<sup>にん</sup>が三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>來<sup>き</sup>まして船<sup>ふね</sup>へ乘<sup>の</sup>り私<sup>わたし</sup>が上<sup>かみ</sup>陸<sup>りく</sup>ると跡<sup>あと</sup>から  
二人<sup>ふたり</sup>先<sup>ま</sup>へ一人<sup>ひとり</sup>手<sup>て</sup>頃<sup>ころ</sup>の捧<sup>たもと</sup>を持<sup>も</sup>つて居<sup>ゐ</sup>ましたから是<sup>こ</sup>れ旅<sup>りよ</sup>賊<sup>ぞく</sup>

仇娘好八丈

と心得逃げやうと云ふ途端も後ろから足を打たれ前へ倒れる處を残り二人りと前の一人とで私を打ちましたか風の音信も長四郎喜次郎忠八と云ふ事が私の耳へ這入りましたか跡の夢中では座います只今お白洲へ出まして眼が醒めたやうで座います越前守「フン其方の白子屋へ養子も参る時五百兩の持参金をいたして参ったか又一へ三百兩の葺屋町の中菊と云ふ芝居茶屋の二階で薬師の縁日十二日の晩に私が未だ白子屋へ養子も参りません中もお常が店の代物が小さくって耻だから何うせ持て来る三百兩だから貸して呉れろとやます又依て人も入れずよ三百兩と云ふ大金をお常も渡しましたよ相違座いますせん夫から主人より出ました二百兩が持参の表も載せてあるので座います越前守「ウン……又四郎其方の喉の右

仇娘好八丈

の方と疵が見ゆるが夫れい如何致して受たる疵ぢや又「エ、是の當年五月二十八日兩國川開きの夜私と菊の間へ平臥して居りますと夜半の頃下女の菊が剃刀を持って私へ疵を附けましたお常は之を拵へ情死よして云ひ立て下女も私通いて居ると云ふ所で私を離縁も致さうと計らひやすと服部小五郎さまのお通りで人殺いと云ふ聲がお耳よ這入り下女と私と密會て居るやう又昏面が上つて座いますか全常の拵へ心中では座います越前守「ウン……シテ下男久助が其方が風呂へ参った時汁の中へ薬を入れたから必らずとも今日汁を吸ふかと久助がやりましたか又「へエ夫れい儲かよ下男の久助が私へ知らせて呉れましたか夫れ私に車力の善八方で朝汐膳を喰べ宅へ歸つて見ますと熊が膳立てを致し火鉢の隅へ土鍋が置いてあ

仇娘好八丈

りましては膳を喰ろと申すから腹が痛いと言すと腹の  
 痛いのよ味噌汁が大薬だから吸へと申すは久助から  
 聞いて居りますので和女吸へと申したら妾の喰べたか  
 ら吸ひ度くあいと申ました察する處ろ毒を入れ私又飲ま  
 せやうとの計らひと相見え申す其處へお常が出て参り土  
 鍋ぐるみ聚るに申すので熊が其土鍋を持ちまして流し  
 へ打附け土鍋ぐるみ破壊して仕舞ひましたへ是は儲か  
 で座います越前守ウソ悪むべきに常で有る下男久助  
 の窮命致して居るぞ近々よ再吟味申付ける左様相心得ろ  
 と是から桑名屋彌惣左衛門代吉兵衛が申して又四郎を  
 受取りました

第十二席

此の話し少し前へ戻りまして白子屋のおつねが又四郎

仇娘好八丈

とおきくを馴合情死といひ觸らした起りを申上げ升草保  
 十年五月廿八日の沙案内の通り兩國の川開きでお常とお  
 熊と兩人で下女のお菊を連れて烟火を見物に参りました  
 大層人が出まして兩國橋の上は勿論並び茶屋まで見物人  
 で埋まつて居りました誰やらの狂歌を見渡せば泡雪烟火  
 の霜價千万兩國の橋と詠んで有ります此の日の丁度夜  
 の戌刻前又烟花がお仕舞よ成りましたから見物人の四方  
 八方へ散亂致します只今まで橋の上が人で埋まつて居り  
 ましたが那處へ居あく成るともなくハラ／＼散つて仕舞  
 ひました屋根船で見物よ出たものも有り或は屋形汁覆し  
 傳馬杯よ日覆を爲て馬鹿囃しで見物よ往つたものもあつ  
 て此方河岸から向河岸まで船で水が見えませんつね菊  
 や面白いのうきくお内儀さんよ妾の斯面白と思ひを

仇 娘 好 八 丈

爲た事の傍座いませんヨお願ひで座い升から來年も川  
 開きよの妾をお連れ下さるやう願ひます……お嬢さん  
 何卒お願ひやます つねアノ菊ヤ和女よ此の簪を進るか  
 ら之をお差し ぎく「オヤ」マア有難う座います……  
 内儀さん此品は何んで傍座いますエ珊瑚珠で座い  
 ますか つねア、夫れの珊瑚珠の銀かんと云ので ぎく「  
 然うで座いますかマア……妾も珊瑚珠の簪を持って居  
 りましたが此間お籠さまの前で居眠を知ておましたら  
 フく溶けちまひましたヨ つね「ホ、夫れの眞正の珊  
 瑚珠ぢやアあい蠟を凝固たんだが此品の眞正の珊瑚珠だ  
 ヨ……サア手をお出しお金を二分進るヨ ぎく「オヤマア  
 お金を……益とお正月が一緒よ参りましたやうで座い  
 ますエ珊瑚珠の簪を戴いた上よお金を二百疋下すッて……

仇 娘 好 八 丈

お内儀さん何んで座いますエ つね「おきくヤ其のうへ  
 お熊が着て居るお召縮緬の半纏よ妾の締めて居る帯を進  
 げるヨ其代り妾の云ふ事を肯てお呉れ ぎく「何んで傍座  
 いますエ……何んでも貴婦の仰しやる事あらは主人さま  
 ですから火を放ると仰しやれば火でも放けますワ此處で  
 傍座います白痴ほど世の中よ可怖ものなあい斯う云ふ白  
 痴を取込んで事を致すので併しお常の惻愍と云ふもの  
 野猿の惻愍で婦女の惻愍の實に可怖い ぎく「何んで  
 座いますエお内儀さん つね「エ他事ぢやアないがノ  
 今夜仲間よ又四郎が寝て居るから和女が又四郎の寐て居  
 る處へ往て又四郎の喉へ剃刀で疵を付けてお呉ナ ぎく  
 オヤ「マア……何んの禁厭で傍座いますエ つね「エ  
 何も禁厭ぢやアあいヨ和女がさうすると又四郎が吃度騒

立つから其時、和女斯う云ふのだ。若旦那と睦い交情も成て居りましたが、お熊さんと云ふお内儀さんが有りませぬ。何うせ若旦那と夫婦に成る事が出来ぬから今夜情死を爲やうと思つて此處へ参りましたが爲損ひましたといふのだよ。宜いか間違へちやア不可い。其事を辭柄よし又四郎を離縁し、忠八とお熊と夫婦を爲やうと云ふ策略だから間違ひちやア往けぬ。必すとも此事を衆人又云ふのちやア無いヨ。きく「畏まりました。参りました。其様な事ゆし致しません。夫れからつね夫れから餘り深く喉を切らんやうな切りさへすれば宜いか。其反す剃刀で和女の喉を切ると切てお呉れ。きく「オヤア……若旦那の喉を切るの宜う座います。が妾の喉へ剃刀で傷を附けるの何んで座います。升ワ……」

其代り大願成就するとお金を五兩纏めて進るヨ。きく「オヤア有難う座います。夫れちやア晩に剃刀で若旦那の喉と妾の喉へ疵を附けます。つね和郎間違ひて呉れちやア困るヨと忠八と娘お熊と並んで居る屋根船の中です。付けましたお菊の年齢十九で座います。けれども百文の中が九十二文抜けて居ると云ふ云ふば、敵ましの馬鹿でけす。是から白子屋一家の者の船から上陸して、那處かで一ト口飲りまして、忠八の家へ歸りませんが、常にお熊と下女のお菊を連れて我家へ歸りませした。

第十三席

さて引續きのお断りで「白子屋の後家お常の下女のお菊をだまして言付けました。が何うかお菊が旨く剃刀で又四郎の咽喉へ疵を付けて呉れ、お常にお菊が疵さへ付け、夫れを

丈八好娘仇

種又離縁をして五百兩の金を踏まふといふ實又宜しくあ  
 い計策で在るに升處ろが其晩下女のお菊がツイ寐忘れま  
 したから夜半又成りまして音も沙汰も無いお常の心配  
 して何うしたのだらうと女部屋へ往つて見るとお菊のお  
 初といふ下女と並んで寐て居りましたからコレは怪しか  
 らんと呼び起さうと思ひましたがお初が寐て居升か  
 らさういふ譯も往かず足の方へ廻つてお菊の足を捕ま  
 へ蚊帳の外へ引張り出したがマダ夫れでも目が覺めず高  
 野で居り升から身体を揺り動かさず 常お菊ヤ〜コレお  
 菊…… 菊ハイ……ハイ…… オヤお内儀さんお早う  
 参上い升 常お菊お静かにおし静かにおしサア此方へお出  
 で 菊おんで座い升ニお内儀さん 常お菊お静かよる為ヨ…  
 ……和女先刻船で頼んだ事をお忘れかエ 菊オヤ〜マア

丈八好娘仇

然うで坐いましてオヤのヌツカリ忘れらまひましたヨ  
 常サア此の剃刀を持って…… 間違ひちやア不可いヨ先刻  
 も教へた通り此世でい迎も夫婦又成る事が出来なから  
 來世で夫婦又成る氣で今晚情死を為やうと云ふので坐  
 いますと間違ひず云ふのだヨ 菊畏まりました 常ソ  
 ンヨと剃刀をお菊又渡して遣りお常の此方へ來て容子を  
 見て居りますと下女のお菊の麻の葉の湯巻一つで仲の間  
 へ行つて見ると又四郎の夢にも斯やうお事存じませ  
 へから能うく寐て居ます五月二十八日の晩でげす突然  
 菊の蚊帳を掲つて中へ這入り又四郎が正体あく寐て居り  
 ます枕元へ素ッ裸体の湯巻一つで坐り剃刀の切れ味を左  
 の掌よて試し 菊「ハア……ハア……」と月代でも剃る氣よ  
 成つて遣つて居りましたが頼て能うく寐て居る又四郎の

丈 八 好 娘 仇

右の喉へ剃刀を宛がひスーッと引きました剃刀で喉を切  
られての懺りません又四郎と目と氣が付き目を登して  
見ると異形あものが枕元と坐って居り升咽へ手を置ッ  
て見るとベツトリ血が付きましたから吃驚致し改問聲を  
張揚げ又人殺しでエーと怒鳴りあがら蚊帳を飛び出し  
ました此時に蚊帳の釣手が取れましたからお菊の蚊帳を  
破ッて仕舞ひ又四郎の騒ぎが餘り激烈いから自分の云ふ  
事も忘れてしまひました此晩加賀屋長兵衛さんの子女衆を  
連れて兩國へ煙火を見よ参り些と遅く坂ッたので旦那  
未だ本筋よ寐ず居りました處ろへ隣家で人殺しだ  
と云ふ聲が深夜よ及んで致し夫れが又四郎の聲のやうで  
すから長兵衛さんコレなと思ひまして直又飛起き裏傳ひ  
よ参り白子屋の裏口の戸をトン／＼叩き長開けさッし

丈 八 好 娘 仇

やい／＼オイ一寸此處を開けて下せへといッても誰も開  
けません奥で又四郎が人殺しだ／＼と騒いで居ます處  
ろへ通り掛りましたのハ八丁堀の定巡り服部孝五郎さま  
で夜廻りよ出まして今新木町の白子屋の門口へ参りま  
すと深夜に及んで人殺しと云ふ聲があ耳よ這入りまし  
から白子屋の門口へイち耳を敲だて内の容子を窺ッて居  
ります裏口で長兵衛さんがドン／＼戸を叩くからお初  
が寐惚眼を刮りながら戸を開ると長兵衛さん急いで上  
ッて参りお常よ向ひ長お常どんや如何したんだナア  
………常「イエ妾よハ一向解りませんが………又四郎如何し  
たんだエ又「ハイ私ハ首が切れちまひました常首ハ附  
いて居るぢやアないか何を云のた子如何したんだヨ又「  
今蚊帳の中へ人殺しが這入りましては寢の通り私の首ハ



仇 娘 好 人 丈

七分通り切れちまひました 長「お常どん一體マア如何し  
た譯だエ 常「何んだか一向よ妾も解りません 長「オヤ  
蚊帳の中よ誰か居るぢやアないかと蚊帳を除ッて見ると  
お菊が剃刀を持ち麻の葉の湯巻一ツで茫然り座ッて居ま  
すから 長「お菊ヤ 菊「ハイ……オヤお隣家の旦那様お早  
う 長「馬鹿奴如何したんだナ何んだッてマア 又「イエ此  
奴が私の咽喉を切りましたので 長「イヤ實は怪しからん  
……お常どん和女の淺墓お婦人だ如何云ふ了簡だエお常  
ん今にお菊が何んとか云ふだらうと思ッて居りましたが  
お菊のお常から教はッた言を悉皆り忘れちまひましたか  
ら茫然して居るを見て 常「是れ旦那斯うでは座いませ  
うお熊と又四郎どの交情の悪いの畢竟下女のお菊と又  
四郎と私通いて居ますから夫婦交情が不和のでは座いま

仇 娘 好 人 丈

す……然うだのウ菊や然うだらうチ 菊「アノチ煙火の面  
白うお在いましたヨとお菊の悉皆り忘れちまッて居り升  
其中表の戸をトンくくコトトンくく「開けるく  
開けねへかど云はれて店の者も人殺しと云ふ聲で眼が覺  
めて居りますすからへエくと半兵衛と云ふ手代が起きま  
して人見を開けて見ると八丁堀のお組の旦那さまですか  
ら驚いて門の戸を開けて小腰を屈ゆ 半「へエく 服部孝  
五郎さまの従者を連れてズツと昇り 服部「何んぢや只今  
表を通行いたすと人殺しと云ふ聲が此方の耳は遣入ッた  
が彼れの店か 半「イエ奥で御座います 服部「奥あれば中  
の間を開ける人殺しと云ふ聲が耳へ遣入ッたから早く塗  
内をしろ 半「半仕切又錠が下りて居ますので……へエ只  
今開けますすから……エ、お内儀さんエ御役人さまが入ら

仇 娘 好 入 丈

ッしやいましてたから中仕切をナヨイと開けて下さいまし  
(是の平素店と奥と別に成って居まして亥刻を報って寐る  
時よの中仕切とヒツマリ締めて錠を卸し店の者が兩便よ  
往く處ろの別よ出来て居ますト云ふのハ殊よ寄つたら忠  
八がと云ふので亥刻を報ますと錠が卸りますから容易よ  
ハ開きませせん)お常の役人さまがと聞いて長兵衛さんも  
共よ驚愕りしました 長夫れ御覽お常どん大變だア……  
大方臨時の夜廻りか定廻りのお方がお通りよあつて……  
〜エ〜 只今開けます…… 此事が表向よ成ると假命令が  
有つても無くつてもお菊の主人の喉へ疵を附けたのだか  
ら此れ御處刑の免れられぬへ咎人を家から出すてエの  
ハ不吉だから乃公よ任せるとお菊の持つて居ました刺刀を  
強奪つて臺所へ擲棄やり 長又四郎どん予が悪いやうよ

仇 娘 好 入 丈

ハ爲あいから何卒 又「エ私しハ此段を訴へます 長へ  
ユ只今開けます 役人早く開ける〜 長只今開けます  
と直又開けやうと思ひましたが又四郎の身体が如何よ  
も血だらけですから着物を替させ其處等を雑巾で拭い  
たが未だ血がダラ〜 出ますけれども他に血止もあいか  
ら烟草を以つて疵口へペントリ附け下帯よて咽喉をグ  
〜 巻きました其中ドン〜 中仕切の戸を叩きますから  
お常の「ア、止せバ宜かつたと思ひましたが今更追若さま  
せん錠を持って中仕切の戸をガラ〜 と開けると服部孝五  
郎さまが先へ立ち用聞物持が従て奥へ遣入り 服部何  
んぢや深夜よ及んで人殺しとやしたのハ何んだ 又へイ  
下女のお菊が私の…… 長「コン…… 恐れながら私の隣  
家よ居ります加賀屋長兵衛とやますが隣家で人殺しと云

仇 娘 好 八 丈

ふ聲が致しました夫ゆる裏傳ひも参りました處ろ是る  
下女が寐蓋けて……是る裸体で居ますの當家の習又  
四郎とすすもので座います下女が寐蓋けて又四郎の  
張蚊の中へ這入りましたのを盗賊と間違ひ 又「エ、さ  
うでい 長コレ……コレ又四郎どんお願ひだから……  
泥棒と騒ぎ立たたので下女が驚ろき逃げやうとするを又四  
郎が追驅け……是れある桂へ鼻を打附けて鼻血がしまし  
たので……コレサ何卒お願ひだから……完く下女が寐蓋  
けましたので座います夫れが耳障り又相成りまして  
相濟みませんが完く下女が寐蓋けたと相違座いません  
とやたので又四郎の口惜しいから明々地よ訴へやうとす  
るのを煤介加賀屋長兵衛さんが無利鎗止せ〜と云ふ  
ので仕方なしと黙つて居りましたが服部孝五郎さまも重

仇 娘 好 八 丈

箱の隅を揚子でせよるやうなさると違我人ばかり多く  
成りますから上役人も内々腹の中で此野郎の下女と通じ  
合て居るナとお氣が附きまして 服部然らば下女が寐蓋  
けたと云ふ書面を呈げる葺屋町川岸の番屋よ扣へて居る  
から 長へエ有難う座いますとこれだ旦那方にお歸り  
よ成りましたから長兵衛さんにお常々散々意見を致しま  
して下女のお菊が寐蓋けた由の書面を呈げたの草保十  
年の五月二十八日の晩で御座います夫れ切り下女の  
菊よの暇を出しましたが愚圖〜爲てぬる中よ下男の久  
助よお常が毒薬を味噌汁の中へ入れやうとしたのを見付  
けた一條から又四郎が大山参詣に参りました羽根田の濱  
で毆殺されて海へ投り込まれましたのが蘇生阿部友之  
進と云ふ醫者の庇陰で養生行届き又四郎の夢の醒めたや

仇 娘 好 八 丈

うき心持で白洲へ出ました時、越前さまが右の咽喉の疵  
をお質問なさいました。因て又四郎より此段有のま、ア  
上げましたので又四郎の舊主人桑名屋彌惣左衛門、預け  
彌々再吟味と相成りました。享保十年十月五日、双方  
差紙で座いますから年内より出ましたの、下男久助車  
力の善八の未だ手錠で座います。此者の頼人で南の番  
所へ出ました白子屋庄三郎病氣よ付き妻の常娘熊病氣を  
れ、若しうあい駕籠で召連れ罷り出ると云ふ殿しい沙  
汰で座います。また桑名屋彌惣左衛門代吉兵衛が附添て  
又四郎が出ました。次は神田三河町二丁目古道具屋喜平の  
娘お菊、江川町の町屋玉井玄貞、媒始人加賀屋長兵衛何れも  
皆町役人が附添つて出ました。白子屋の一件で大變を  
人敵で座い升さて、沫刻のお太鼓で越前さまは退出成

仇 娘 好 八 丈

り白洲へ出ました。なるどお腰掛けも居るもの、殘らず呼  
び込れました。が今日の白子屋一件の再吟味が率先で座  
います。關係人一同の砂利の上に出ます。越前守さまは  
川箱をお扣へあすつて、越前守、即人善八相手方庄三郎病  
氣よ付き代つね娘くまを召連れしました。か つね、ハイ召連  
れまして座います。越前守、江川町町屋玄貞、玄へい  
越前守、桑名屋彌惣左衛門代吉兵衛又四郎を召連れしました  
か、吉石連れまして座います。越前守、三河町二丁目古  
道具屋渡世喜平娘きく、菊、ハイ、越其方、菊とヤすか  
きく、ハイ、妻し、きく、とヤます。ワ、ハイ、越其方、何才ちや  
●きく、ハイ、妻、十九で座い升、ワ、ハイ、來年の廿歳、な、り  
ます。んで、越餘程、其方、才物の奴ちや、伶俐、お奴ちや、ノ  
きく、ハイ、衆人さんが、然う仰しや、います。ワ、ハイ、越、もうッ

仇 娘 好 八 丈

と前へ進め〜 きく「ハイ……殿さま何んで座います  
 エ 越イヤさきく只今奉行が尋ねる事を今日日匿すナ陳じ  
 るナ有休サせ有休にサせば奉行が共方へ褒美を取らせる  
 ぞ其代り隠し立を致すと據あく究命をサ付るぞヨ きく「  
 イヤ〜……妾の久兵衛と成りましたかエ 越白痴奴究  
 命とサすの馬傳町の獄舎へ入れる事を云ふのだリ此方の  
 尋ねる事を有休サせば褒美を遣わすぞ きく「オヤア  
 有難う座います……何んで座いますエ殿さま 越さ  
 く……當年五月二十八日の夜主人つねとくまと共方と  
 三人で兩國へ煙火を見物も参ッたらうナ」と問われてハイ  
 然うで座います煙火見物も参りましたと云つても宜い  
 のですけれども根が馬鹿だしおつねが傍も出て居ますか  
 ら見なくとも宜いのよヒヨイとおつねの顔を見るとおつ

仇 娘 好 八 丈

ねの腹でいさすか聲を出して何も云ふなと云ふ譯よの参りませ  
 座いさすか聲を出して何も云ふなと云ふ譯よの参りませ  
 んから砂利の上も両手を突きあがらおまきの酒を見てナ  
 ヨイ〜ツツと眼を動かしたから幾ら馬鹿でもア、是  
 の云ちやア悪いのだナと解りましたから きく「イエ〜  
 左様お事な座います煙火や何かを見え往つた見えの  
 座いませせんワのイとサ立てましたが高處と下で座い  
 升からおつねが眼でいふおと指圖した事な越前様ナヤ  
 ノト承知で座い升 越コレまく主人つねから何もサ  
 あと口を止められて居るだらうナ……コレ克く承はれ此  
 奉行も見物も参ッて共方共が飛居た比隣の屋根船で見  
 て居たぞ主人つねくまばか〜で無いと忠八云ふ男も  
 船の中も一緒居たらうナ……聞知して居たらうナ一

丈 八 好 娘 仇

緒に乗って居たらうナ、さく「マア能く存じて居るは坐いす  
す子……マア内儀さん殿さまも煙火を見物よお出あす  
ッて隣の船で見えてお在なさいましたとサ……左様では座  
いませすマア能くは存知で居らッしやいませと忠八どんは  
途中から迎ひよ遣て兩國まで参りまして三浦屋といふ船  
宿から一緒よ乗りましたワはい越「ワン奉行儘か又見て  
居たから辨へて居るぞ正直よせ褒美を遣すぞ必ずしも  
隠すナ……エ、其の砌り主人つねから聲又四郎の喉へ割  
刀を以て疵を附けるも其方云ひ付かつたで有らうナ其方  
の種よな物を貰つたで有らうナさく「オヤ、マア……  
どおさくの有の儘饒舌て宜いか悪いか解りませんから  
奉行の顔とおつねの顔色を見ておましたがおつねもおくま  
も腹の中でア失錯たとい思ひましたがお白洲のとですから

丈 八 好 娘 仇

止せと云ふ譯よの参りません操ろなく首を下げ兩手を突  
いて居りましたがおつねの悪才の働く婦人ですから頭を  
垂れて辭柄を案出で居りますさく「お奉行さまは他人の  
腹中まで存知ですから上げますから上げますが  
其時珊瑚珠の管とお金を二分貰ひました其上乃公の依頼  
を應と云て問違ひなくすればお召縮緬の半纏を  
遣る大願成就致すとお金を五兩遣るッて如何なよ可笑う  
座いましてらう殿さま其の晩妾の云ひ付かつた言を悉  
皆り忘れちまつて能く寝て居ますとお内儀さんが妾の足  
を捕まへて蚊帳の外へ曳摺り出して夫からお内儀さんが  
怒つて妾よ剃刀を渡しましたから中の問よ寐て居ます若  
旦那の蚊帳の中へ這入りまして若旦那の咽喉をナロイと  
切りますと若旦那が驚ろいたと見えて泥棒ウ人殺しいと



仇 娘 好 入 丈

驚鳴られましたので妾の内儀さんから致つて置た事を  
忘れちまひましたヨスルと隣の旦那が裏口から入来  
おさいましてお内儀さん大變叱言を仰しやツて妾の事  
を馬鹿くと仰しやいまして本統も可笑う御座いました  
り若旦那が首が無いッて彼方此方と自分の首を探して居  
ました何が何んな可笑う御座いましたらう腹の皮を捨  
りましたワハイ然うすると表から役人さまが這入てお  
入来なさいましたので加賀屋の旦那が驚ろきまして若旦那  
那の蚊帳から飛出す途端柱へ鼻を打付けて鼻血を出し  
たんだッて恐ろしい虚言をお吐きあさいましたが……コ  
レで宜しう御座いますか 越夫から如何した きく然う  
すると直にお腹が出まして五兩のお金もお召縮緬の半纏  
も下さいませんワお内儀さんの恐ろしい虚言吐で御座い

仇 娘 好 入 丈

ますワはい是れで宜しう御座いますかイ 越ウシ……つ  
ね如何ぢや其方の可悪い奴じや有体申せ如何ぢや如何ぢ  
や つね恐れながら跡方も御座いませぬ虚構で斯やうま  
愚かお奴の申す言をお取揚げも成りましての誠な情なり  
御座います私ハ 越其方の不良い主人を持ち永い間だ宛  
助久助 久ハイ 越其方の不良い主人を持ち永い間だ宛  
命致して居たナ……きく きく 越彼處も居  
る玄貞と云ふ醫者を其方存知て居らうナ きくハイ……  
オヤ 坊さん出てお出だす……妾の存知て居ますワは  
イ 越きく彼なる玄貞と主人つねと同衾寐を致して居る  
事を其方知て居らうナ きくオヤ尊公何んでも御存知で  
御座います子……アンを油壺から曳摺出したやうな汚穢  
い坊主の妾の忌で御座いますヨ或晩何んだか知りません



仇 娘 好 八 丈

が妾が小用よ起てヒヨイと見ましたら蚊帳の中よ這入て  
 何か話を爲て居ましたか殿さまの何んでも能く御存知で  
 御座いますねへ 越「ウン……サアつね共方が味増汗の中  
 へ混入たの宇頭散でい有るまいハンミヤウとか申す人の  
 身体よ大敵薬の毒を入れたので有らうナ有休申せ如何ぢ  
 や つね「恐れあがら夢も存じません 越「立貞もりつと前  
 飲ませる宇頭散又相違御座いません 越「立貞もりつと前  
 へ進め 越「立貞もりつと前  
 ンミヤウと云ふ毒を調合致して宇頭散と云ふ名稱を附け  
 て遣したよ相違有るまい有休申せ如何ぢや 立「恐れあが  
 ら 醫の仁術よして毒杯と調合致すの醫者の方よ御座いま  
 せん勿論毒薬發じて薬と相成る 越「扣へろ汝れ如何様よ  
 陳じるども宇頭散でいあいぞ毒薬よ相違ないぞ……共方

仇 娘 好 八 丈

の少し調ぶる事是れ有るよ依て今日の歸さんぞ立貞よ繩  
 ア打てエと立貞が最初よ繩よ掛りました 越「サアくま其  
 方が二世と云ひ交した忠八の何處よ居る有休申せ如何ぢ  
 や如何ぢやと恐嚇され今年二十一よ成りますすおくまです  
 からオド 爲て眞青よ成て震へて居りますす傍から小聲  
 で つね「云ふやアあいヨ くま阿母さん心得て居ますか  
 ら つね「云ふぢやアないヨ 怪しからん事だヨ……恐れな  
 がらつね申上げます忠八の先頃ろ逐電致しまして今よ行  
 方が知れません位で娘に忠八の居處をお尋ねでも知りま  
 すまい又妾も辨へません 越「ウン屹度云ふあ……云いぬ  
 處を云いして其裁断を致すのが奉行の役で有るぞつねく  
 ま其方ども兩人も今日の日歸さんぞ……兩人よ繩ア打てエ  
 と茲でおつねもおくまもお繩を頂戴致しました處ろがお

仇 娘 好 八 丈

つねおくまの兩人が番所へ出て往く時、忠八を長持の中へ入れて、隠匿情夫として置きます。九月頃、から宅へ曳摺り込んで有りまして、御番所へ出る時、二階へ昇げて壁面へ長持が押付いて居ます。蓋を持ち上げて開ければ、何時でも出られ、長持の中、郡内の布團が敷いて、八反の抱衣、綿袍、虎入が這入て居り、飯食物の重箱も入れ、密とおくまが持つて、遺て有りませすから、何んの事の無い、蠶所と雪隠と一緒、成て居るやう、お譯で御番所へ出る時にもおつねの長持の蓋を開けて、つねお、忠八、今日、御番所へ出るが、御名奉行の越前さまだから、殊よ寄ると留られるかも知れんが、おくま、丈けの歸して、遣すから、方一として、妾、丈け歸らんで、娘ばかり歸るやう、だつたら、和郎等二人の嗜、た同志だから、那處へでも往て、夫婦も成つてお呉れ……此金の路用

仇 娘 好 八 丈

だから百兩進けるヨ……此品の脚半、草鞋、たヨと一切、支度を入れて、通り我家を出ましたから、忠八の長持の中で、多方神信心を致しましたら、うが逆の神信の利、ませんさて、今日、忠八の存知ませんが、おつね、おくま、玄貞の三人、お繩を頂戴致しました、越さく、きく、ハ、何か下さ、いますか、エ、嗟、可、さ、て、不便、千萬、か、不、良、主人、を持ち、俱、よ、奈、落、へ、引、れ、往、く、か……其、方、が、又、四、郎、の、咽喉、へ、疵、を、附、け、た、事、が、表、向、に、成、れ、ば、其、方、も、今日、の、歸、す、譯、よ、の、往、か、ん、ぞ、入、牢、を、付、ける、繩、ア、打、て、エ、き、く、カ、ヤ、く、虚、言、バ、ツ、か、り、と、云、た、が、最、う、退、附、き、ません、越、久、助、其、方、の、永、い、間、だ、究、命、致、し、て、居、つ、た、が、今日、の、出、牢、付、ける、ぞ、ヨ……善、八、其、方、の、今日、手、錠、免、し、付、ける、善、有、難、う、御、座、い、ま、す、久、有、難、う、の、座、い、ま、す、と、下、男、の、久、助、の、出、牢、で、す、か、ら、大、き、よ、悦、び、ま、し、た、又

仇娘好八丈

四郎の主人彌惣左衛門へ預けとあり 越双方立てエと云ふので此處で兩人の立ちました 却説忠八の長持の中に這入ッて居ました 日暮方に成たやうだが今の知れませぬ 忠ハチあ最う彼是日暮方に成たやうだが今に歸らぬのに入半までも成たか夫れとも内儀さんの中よく才物だから旨くお奉行を欺騙して歸ッて来るか知らん如何したかと案じられるから種く考へて居ますと杉の森の方の夜廻りがナヨンくナヨンくンと標を撃ちあがら 夜番酉刻では座いますと云ふ聲を聞き思八の餘り運へちやアないかと思ッて居ます處へトンくくと梯子を昇ッて来るやうな足音が致しましたから 忠ア締めたお熊が歸たか知らん 小僧お初とん 初何んだエ 小僧お内儀さんやお熊さんの如何成たんだエ 初入半だと

仇娘好八丈

小僧入半てエの何んの事だエ 初解らあいなへ半へ這入たんだヨお内儀さんが不真いからだつサ妾の何にも知らあいけれどもアノ玉井玄貞と云ふ色の黒い思な坊主とお内儀さんと變なんだとサ慙然うなのにおきくどんだヨ何も知りもしあいで和郎不良主人を持ちたばかりで半へ這入たんだつサ 小僧大變だねへ此處の家如何あるのだらう 初開所よなるんだとサ 小僧開所てエの何んの事だエ 初お上へ没収に成つちまふのサ 小僧へお上の狡猫もんだナく 夫れから奉公人の如何あるんだ初皆を實家へ歸るのサ 小僧イヤ一嬉しいナ家へ歸れるのかイヤ一嬉しいなく 宿下と開所と同じやうだナ 初馬鹿さ言をお云ひであい夫れよ就てお氣の毒なの大旦那だヨ夫れよ庄之助さんも宅へ歸る事が出来ないと云ふ

仇 娘 好 八 丈

の江口博ひとやらに成て慙然うだま云ふ話を長持の  
中で聴いて居ました忠八の此りやア大變だシテ見ると伯  
父の玉井玄貞も下女のお菊もお常どんもお熊も牢へ這入  
たか是りやア迷子く爲てぬての大變だと長持の中で徐  
々脚半を着け草鞋を穿き五十兩の金の鯛巻も這入つて居  
ますから夫れを懐中へ結び付け是から皆の寐静まるのを  
待て長持から出て逃げやうと云ふ量見小僧お初どん一  
緒又寝てお呉れお熊さんが着て寝る絹布とか云ふ柔か  
い夜具を着て一緒お寝やう初寝小僧便を放れちやア思  
だヨぢやア跡先合て寝やうとお初と小僧とが跡先合て寐  
ました何しろ主人の家が滅亡ある事ゆる餘り好い心持ち  
で無いから本統お寐付れずウトく爲て居ますと杉の森  
の方からチヨンくチヨくン 番人戌刻では座アい忠

仇 娘 好 八 丈

八のモウ寐静まつたらうと思ひ壁へ手を宛がつてグーイ  
と押すとお初お心持が悪くツて寐られませんでした  
が是を見て驚ろき初オイく小僧どんく小僧エー  
初長持が化けたから見あヨく小僧ヤア長持が化  
けやアがつたと云ひあがら小僧お驚いて天窓から夜具を  
冠ッて仕舞ひ袖の處から覗いて居ます中お蓋が開いて中  
から人が出るを見て小僧イヤ一笠ア口へ咬へて左の手  
へ道中差を持って長持を跨いださて忠八が今出やうとする  
時下女のお初お正可忠八お思ひません平素夜具布圍で  
も這入て居るんだらうと思つておました長持ちから人が  
出ましたから吃驚り致し金切聲を張上げ初化物だーと  
云ひながら飛起き梯子段を逃げ下りやうとするを見て忠  
八の失策たと思ひましたから口に咬へて居た笠を落し道

仇娘好八丈

中差の箱を拂ひ今二階から下りやうとする下女のお初の  
九階の上からサッーと斬付るお初のアツと云ッてガッ  
くストンと二階から落た小僧の天窓から夜着を冠ッて  
仕舞ひましたから是の斬られません忠八の取急いで刀の  
血を拭ふ間も然いから元の鞘も納め笠を冠ッて物干へ忍  
び出で杉の森の本又捕つてスルくトンド下り夫から  
逃げ去りました白子屋の店の者の物音も驚き駆け付けて  
見るとお初の氣絶を爲て居ますから段々介抱して聞きま  
すと長持の中から人が出たと云ふ小僧の別又氣も絶せず  
無難で助りましたが棄置れませんから此段訴へよ及びま  
したスルと傍の抱き視が下りて長持の中を調べますと郡内の  
布圍又八反の抱き綿袍と重箱の中へ養染と飯が道入て  
傍の方に虎子が有りますから検視の役人の何んでも是

仇娘好八丈

の八が住で居たに相違ない多分是の忠八で有らうと直ぐ  
よお手先もお手配りにあつて嚴くお尋ねあさいました  
忠八の親父とやすの淺草阿部川町に住む前裁賣の與兵衛  
とやまして忠八が十一才の時よ白子屋へ奉公よ遷りまし  
て夫れが成長致し男振が好いから遂々お熊よ思ひ附かれ  
て此騒ぎよ相成りましたが忠八の居所が解りませんから  
白子屋の家内の者の自身番へ呼れたり手先の衆の忠八の  
親與兵衛の家へ参ッて家探し杯を致しましたさて忠八が  
白子屋の二階を抜け出した晩の強雨で車軸を流して降つて  
居ます與婆アさんや大層大降りよ成たのう風雨よでも  
成て呉れあきやア宜いのう婆ア、斯う降たら暴れる氣  
遣ひも有るまいが……忠八の如何したらうキホンにマア

第十四席

仇 娘 好 八 丈

彼の子の夢ばかり見て居るが白子屋を逃出して那處へ往  
たらう子 奥本統又乃公も夫れが案じられるのヨと云て  
居ると門の戸をトンくく 叩くものあり升 奥婆さん  
誰か裏口の戸を叩くぢやアねへか 驚い、エ彼ハ狗が耳  
を掻て居るんだヨ 奥イヤ然で無い…… 又戸をトンく  
叩き阿母さんく 奥屋がするぜ往て見あ 驚アイとあ  
袋が立て裏口の戸をカフリト開けますと笠を冠ッて濡れ  
レヨボレ 忠阿母さん 母オ、忠八か 奥忠八か此方へ  
昇れといひあがらフツト燈火を吹消し出て参り草鞋を脱  
せるも間も有ません濡たま、で上へ曳揚げヒヨツと他人  
又立聞でもされちやア成りませんから三人よて二階へ昇  
りました 奥さて忠八汝ハア頓だ事を爲出來て呉れた  
かア 忠へエ阿父さん誠よ相濟みません何卒勘忍して下

仇 娘 好 八 丈

さいまし 奥イヤ夫れハ宜いが岡ッ引とやらが来て宅の  
様の下から戸棚の中から二階から雪隠の中まで探した殊  
よ寄ると乃公を牢へ入れると云た併し乃公ハ死んでも宜  
いから如何して汝を助けて遣り度い 忠阿父さん如何爲  
たら宜う座いませう 奥今まで那處に匿れて居た 忠  
へエ杉の森の稻荷の社の様の下又匿れて居ました 奥喰  
物が有まいよ 忠ナニ夜更けて人形町へ出まして残餘た  
物を買ひまして其物を喰て居ました今晚ハ斯やうよ大降  
りを幸いよ様の下を抜出して参りましたが最早江戸表よ  
も居られませんかから暇乞を致したうへ此大降を幸ひよ  
那處へでも往き度く思ひ升 奥ウン逃げて呉んか捕れば  
云はずと知れた涉處刑よある併し逃げて往く所ハ……  
母ウン…… 斯う云ふ時だ美濃の郡上の藤巻村の安兵衛

仇 娘 好 八 丈

の處へ手紙を附けて遣たら助けて呉れるでせう 奥違へ  
ねへ婆さん好い處へ氣が附いた待て〜と行燈の火光を  
點じて假名ではある忠八とすものは十一の時材木屋へ  
奉公も遣て斯様くでは坐います何卒一人の悴ゆる隠匿  
て助けて下さいと眞實の事を認て忠八も持して遣りまし  
た此の奥兵衛の誠も子供可愛がりですから他人の子でも  
可愛がる況して眞身の我子ゆる大變も可愛がりより併  
し此奥兵衛と云ふ仁の奇体ある男で那處の子でも親も失見  
泣いていも居ると家知らねへかヤレ可哀相も乃公が連  
れてッて遣ると迷子も限らず自分の家へ連れて来て其子  
の家が知れないと稼業を休んで二日も三日も係り家を探  
して連れてッて遣ると云ふ恐しい子凡惱み仁で毎度家主  
も叱言を云ひれて居ました之れは過ぎ去つた断しでは坐

仇 娘 好 八 丈

い升が或日暮れ方湯島切通を籠を引ッ擽いで那處で飲だ  
か能い機嫌も千鳥足で 奥、サア日本一の奥兵衛さんだ迷  
子拾ひの奥兵衛さんとア乃公の事だ……ア、好い心持  
だなア甚く淋しいナ殊も寄ると追廻が出るヨ併し乃公あ  
んぞア何も取れるもの無へから安泰だア、好い心持  
だぞ往來の人も無へから妙さ聲で歌杯を唄ひあがら切通  
へ掛ッて参りました(現今の賑かでげすか享保頃の日が暮  
れると人ッ子一人通りません位で) 奥、オヤ何んだ……松  
の樹の下に女がイテ居やアがるか……ア乃公を化さうて  
ユんだな狐ださ笹棒奴狐位ぬよ化されておたまりこぶし  
が有るものか……サア尻尾を出せ〜 女、免下さいま  
し……何卒見遣して殺して下さいまし 奥、ナ、此奴め狐  
が女よ化やアがつて此の奥兵衛さんを欺そうてユんだら

仇娘好八丈

う 女「イエ、く、何卒……」 奥松の樹は細帯が紐下てるま  
 ……コ、汝の何んだ 女「ハイ、妾の狐や狸じゃア、坐いま  
 せん如何しても生存て居られませぬのですから何卒見遣  
 して殺して下さいまし 奥「ハ、一物の云ひやうぢやア、狐  
 でも無いあア……」 此處で首を縊らうてエのか……夫れは  
 大變だが是の屈竟あ助けものだ迷子との違はア乃公の阿  
 部川町に居る迷子拾ひの奥兵衛と云ふものだが乃公が汝  
 を助けて遣る 女「何卒、見遣しなすッて 奥「エ、一何て  
 ツても助けずには置かん名代の奥兵衛だ乃公の此事ゆゑ  
 貧乏爲てエるのだサア来いと無理矢理は女の手を曳張て  
 我家へ連れ歸り 奥「婆さん今歸ったヨ 婆「又和郎喰い酔  
 て来た子宜い加減におし 奥「オ、婆さん乃公ア今日屈竟  
 の助もんを爲て来た此姐さんが湯島の切通で首を縊らう

仇娘好八丈

て、處を助けたんだ 女「願ひで御座います……」 妾の歸  
 りますから 婆「エ、一ア宜いから何んでもお昇んなさ  
 いと其處の連添ふ女房だから無理矢利は此娘を上へ曳揚  
 げました奥兵衛の草鞋を脱り足を洗ッて昇り 奥「婆さん  
 其娘を戶外へ出しちやア不可いヨと云ひあがら戸棚より  
 薄抱巻と枕を出しコロリと横又成るが早いカグ、高  
 敷で寐てしまひましたが此事早くも近所の人又知れます  
 と家主が遣て参り 家主「また迷子を拾ったううだナ 婆「  
 イエ、迷子での御座いません 家主「ナ何んだエ 婆「アノ姐  
 さんで、座い升 家主「迷子じゃアないと 婆「ハイ、家主  
 ナニか那處から連れて来たんだ 婆「何んで御座いますか  
 湯島切通を通り掛ると屈竟の助けものがあつた首縊を助  
 けて来たつて此娘を置ッ放しよして寐て居ます 家主「ム



仇 娘 好 入 丈

一人一人助けたのだから叱言の云はねへ叱言の云はあ  
 いが那處のもんだへ 娘ハ 妾ハ 美濃の郡上の藤巻村の  
 名主安兵衛の娘で名を花と申す 家主ハア幾歳だへ  
 花十九で座います 家主如何してまた和女ハ江戸表へ  
 出て来たんだへ 花ハイ…… 村内の藤吉と申す男と密通  
 致しまして親の許さぬ悪い事を致しましたが美濃ハ居り  
 ましてハ夫婦成れせんから江戸へ出て夫婦成らう  
 といふので親の金子を盗んで着類を持出し其男と二人で  
 當地へ参り馬喰町の大坂屋長兵衛とか申す宿屋ハ泊つて  
 居りましたが二三日已前ハ其の藤吉と申すものが妾の金  
 子と着類を持って那處へか逐電を致しまして妾一人大坂屋  
 さんハ残つて居りましたが如何する事も出来ませすト云て  
 國の親元へ手紙を出す譯にも参りませんから今朝は飯も

仇 娘 好 入 丈

喰ないで宿屋を逃出しまして兩國とやらへ身を投擲と存  
 じましたが人通りが多いので死ぬ事が出来ませんから一  
 層人通りのあい處へ往て首を絞つて死ふと覺悟と極た處  
 當家の旦那がお通り係りあすつて救助遣らうと仰しや  
 ッて妾の手を捕へて無理矢利よお連れ下さいましたか……  
 ……お願ひでは座います妾ハ歸ますから 家主「ア」  
 お待ち夫ハ不可ン一旦予の耳へ這入て見ると歸す譯ハ  
 往かん今歸せばまた身を投げるか首を絞るか極つてる  
 ……婆さん一寸與兵衛殿を起しおヨ 婆「ハイ……ナヨイ  
 と和郎さん差配さんがお入來あすつたヨ……ナヨイと和  
 郎さん 與「ア」ア、……ハア、何うもウ…… 婆「お起  
 ……お起ヨ 與「ア、何うも……ヘエ……是はく  
 如何か最う四五日は勘辨を 家主「イヤサ宿賃の催促よ來

仇 娘 好 八 丈

たんちやアあい……與兵衛どん和郎様も居る姐さんを知  
 て居るかイヤサ此娘を知て居るかヨ 與へエー……婆ア  
 さん此姐さんてエの那處も居るんだ 婆御覽あさいま  
 し自分がつれて来て忘れて居ます食酔てましたから……  
 能く御覽な和郎が湯島の切通しから連れて来たんぢやア  
 ないか 與ム、一違へねへ然うだスツカリ忘れちまつた  
 ……エ、旦那さま小哥が今日暮方よ切通しを通り係りま  
 すと此娘が首を纏らうと爲てエたのを狐と間違へました  
 が如何も物の云ひやうが惜かでげすから迷子と違ひ屈竟  
 の救助も物と思ひ陰徳を施して救助て来ましたから懇め  
 て下さいまし 家人命を助けるのだから誠又宜いが此の  
 姐さんの居宅を那處だと思ふ……美濃の郡上の藤巻村だ  
 と云ふ美濃と云へハ江戸から百里も有るてエ事だト云て

仇 娘 好 八 丈

此娘一人り戶外へ出せばまた首を纏るか身を投るか又極  
 ツて居る宜いか藤吉とか云ふ情夫と夫婦に成り度とか云  
 ふので親の金を窃んで逃げて来たんだ處が其奴め此娘の  
 金や羞類を持って二三日已前よ何處へ驅逐を爲たんで姐さ  
 んが一人で宿屋も居られねへ處から今朝御飯も喰あ  
 んが旅籠を出て方々彷徨て遠く切通しで首を纏らうとする  
 で旅籠を助たんだが此儘よして置いちやア佛造ッて  
 處を其方が救助たんだが此儘よして置いちやア佛造ッて  
 精神入れずだから美濃の郡上まで此娘を送り届なけれバ  
 らねへヨ 與へエー 仕方が有りませんから送り届けて  
 道りませら 家主送り届けるッて百里の道程だヨ十里詰  
 と思ッても往くばかり又十日掛るヨ殊よ婦女の足弱で歸  
 途よ六七日係ると見た處が一日の費用一步二朱と見做て  
 も大變よ係るヨ宅のお内儀さんだッて喰はずよ居られ

丈 八 好 娘 仇

まへ其他店賃の兎も角もとして其金の算段の出来めへサ  
ア如何するく 奥へユ……此奴ア大變だ 婆和郎如何  
する氣だヨ妾だッて喰いずよア居られるいヨ考へて御  
覽お 奥ム、此奴ア一大變だナ……ぢやア此娘を舊の通  
り湯島の切通しへ筋と置いて歸ッて来やうか 家主イヤ  
乃公の耳へ還入た以上乃夫りやア肯ねへだから日頃乃公  
が云いねへ事ぢやアねへ少しの自分の懐も金を貯めて置  
かんと他人を救助する事出来ねへ迷子を拾ッて来るバカ  
りで貧乏して困ッてるんだが悪い事云いぬへから……  
併し此姐さんが首を絞らうとする處を救助て来たもんだ  
から乃公が二兩貸て遣る宿賃の如何でも宜いとして二兩  
で人の命が助ければ結構だ後日で稼いだら返せ日掛けも  
も爲ろ夫から長家の者よコレく と譯を話し奉加帳同様

丈 八 好 娘 仇

ものものを拵らへ二朱でも一分でも宜いから心有る者よ奉  
加帳よ附いて貰ッて和郎が此娘さんを送ッて往く路用に  
して遣らうと此處で家主が長家の者よ話しますと 甲宜  
しう御座います私に二百疋差出させう 乙私しに二朱  
丙私の一步と家主が此氣合だから十七軒有る長家の者  
が夫々皆出しました之を集めて見ると二兩と云ふ士蓋が  
有りますから六兩出ましたので宅へ一兩置いて奥兵衛  
の五兩持ち彼の娘と連れて夜を日又繼ひて美濃の郡山藤  
巻村へ着ましたが娘の親の家でも大業の道入れません  
娘毎公お願ひで御座います直ぐも宅へも歸れません  
からお日待の時村の若者が集ッて踊を踊る處が有ります  
其の家へ参り 娘御免あさい 婆ハイ…… 娘妾だヨ今

丈 八 好 娘 仇

姉ッたヨ 婆オヤ娘さんかい…… 爺さん名主さまのお  
城さんが 爺是ハハイ…… 和女さん如何なすったエ當地  
の騒ぎの大變だッたヨ大坂から京都から江戸まで追手が  
出て居るので 娘何卒阿母さんと呼んで下さいナ 爺ア  
、宜うがアす直ぐ又呼びよ参りやすとお袋を呼びよ行き  
ました何しろ可愛い娘が歸ッた云ふのですから兩親の  
飛んで参ると娘は面目赤いから俯伏きながら 娘阿父さ  
ん阿母さん堪忍して下さいまし皆を妾が悪いので座  
ます…… 此方よ一命を救助にお賞ひ申しましたから能  
くお禮を云て下さいましと云ふ此處で安兵衛の與兵衛を  
我家へ連れて参り美味い物を馳走して三日ばかり留め  
て置き種々馳走を致し與兵衛が愈々江戸へ歸ると云ふ  
時よ安兵衛が金子を搾り出まして 妾さて與兵衛さん

丈 八 好 娘 仇

備さんのお影で私一人の娘を拾ひました就きまして此  
金の甚だ輕少ですが二十五兩何卒は道中の移入費よお消  
費あすッて下さいましたまだお目よの掛りませんが家主  
始めお家長の衆へも宜しく願ひますエ…… 此十兩でお  
家主へ何かの氣よ適た物を買ッて遣げて下さるやうよ夫  
れから此十五兩でお長家の衆へ宜きやうよして下さいま  
いと都合五十兩出しまして 安來年江戸へ参りましたら  
是非お宅へ罷出ます其砌りお家主からお長家の衆へも  
禮を上げますがまた何うか和郎さんの方よ事が有ッて  
私で出来る事をなら何んありとも此方へ向けて遣して下さ  
い此の恩返しを致さなけりやアなりました毎年何卒年  
始状の贈答を致さうと云て三里餘も名主が送ッて参りま  
したから村内の若者も附いて参り茲で別れを告げました

丈八好娘仇

が與兵衛は往く時と歸途けとの大途ひで泊りを重ねて江  
戸表へ着し日の暮方よ阿部川町の我が宅へ歸りガヲリ門  
の戸を開け與婆ア今歸った婆今歸ったぢやアあいよ  
何時まで何を爲てぬんだヨ 與馬鹿ア云へ何んでも首  
縊と救助るよ限らア二兩の金か僅かの中よ八兩利が付い  
て歸つて来た……長家の獸類奴 婆何んだ子然んなよお  
威張りでないヨ 與威張たつてい、や何だつてこれく  
と金を出して家主長家へ遣りましたさて是ハ夫切りよ成  
て只手紙の贈答を爲て居り安兵衛も江戸表へ参り娘の世  
話よ成った禮を家主始め長家の者よも申ました處で此度  
一人の悴が切迫詰りて行方が無い處から忠入よ手紙を附  
けて安兵衛の處へ遣りました忠入の右の手紙を持ち成丈  
け夜分ばかり歩行くやうよ致して宜い鹽梅よ美濃の郡上

丈八好娘仇

の藤巻村へ着致し名主安兵衛の家へ参り 忠私ハ江戸淺  
草阿部川町與兵衛の悴では座いますと彼の親父の手紙を  
出しまえた安兵衛の請取り開封して讀んで見ると有の儘  
が認て有りませす何よしても名主を勤めて居ます安兵衛だ  
から腹の中で此奴の怪しからん奴だ親よ似ぬ鬼ツ子だ與  
兵衛の實情の人だが此奴の二世と與約した女房同様のお  
くまが入半主人も入半よ成つて居るよ此奴の助かつて斯  
んな草深い處へ來ても生存へ度と心得違ひ野郎だ人  
間の皮を冠った畜生だ併し與兵衛さんよ恩返しだから  
喰はしての置くが必らずとも此奴と口を利く事あらん  
と連添ふ女房よも娘花はじめ奉公人一統へ吩咐け忠入を  
納戸へ入れて置きました忠入の喰はしては呉れますが納  
戸から出る事が出来ません夜分退窟だから回爐裡よ多勢

仇娘好八丈

奉公人が烘つて居ますから其處へ来て江戸の話しを爲たり先方の話しも聞かうと思ふと一人立ち二人立ち何時もなく皆立つて仕舞ひます跡へ残るの目自在引ッ掛つて居る鍋ばかりで正可鍋と話しをする譯よ往きません忠八の心の中で此奴不實な奴ぢやあねへか當家の娘の阿父のお影で救助で貰ひ今で亭主を持つて小兒の二人も出来て居るよ乃公が来て居るのを蒼蠅く思ひ喰せるの無駄だと云はねばかり又碌に物も吐しやアがらねへ思々しい畜生だと愚痴を覆しあがら喰ちやア寐エ〜爲て居ました斯して十二三日も居りましたが所在が無いから毛拔を借りまして日照の宜い處へ出て鬘を抜きあがら主人おつねおくまの事杯を考へ出して不圖土間を見ますと牡鶏が「コ、と小虫を探し出し牡鶏を呼んで喰はせて

仇娘好八丈

居るのを視て 忠ハアな是の不思議だ鶏の日本の名鳥だてエが牡鶏が出を探して牡鶏も喰はせて居るか……人の萬物の長と云ふ矢張亭主が探いで噂を養ふ……ア、一是は面目ない乃公の此牡鶏も劣る女房同様のおくまよ爲る主人おつねよ爲る乃公ゆゑよ今まで苦勞を爲て居るよ乃公の斯んな處へ匿れて、命を全く爲やうなんてエの心得違ひだ嗟呼入る……されば江戸へ歸り驅込み願ひを爲て重き處刑を受けた方が宜いと鶏を見まして心の岩戸が開いた忠八納戸を開けて出て参りますと安兵衛さんと内儀と娘で手拭を冠つて浮飯を喰べて居ましたが忠八の姿を見て周章しく 安「コレ〜 忠八さん〜 夜どの違ひ白晝出で来て滅法界もあい……和郎のお影で手の肩衣も係ります 忠「イヤ最り私の人衆人見附かつても苦し

仇 娘 好 八 丈

うは座いません 安和郎の苦しく無からうが子の苦し  
忠私の最早お暇致しまして江戸表へ歸り潔よく訴へ出  
で沙庭刑受ける心算で沙座います 安忠八さん夫の如何  
云ふ譯で 忠實の只今鶏を見まして心の岩戸が開きまし  
たと云ふのの新様くして沙座います斯う遣て居ましての  
實は耻入る位で座いますと云ふので安兵衛の感服し  
安夫れでこそ和郎の本統の人よ成た是迄和郎の身体が予  
の眼よの畜生よ見えた阿父さんの可愛い子だから助け度  
と思はッしやるのも無理ないが和郎の何んと主人なり  
女房なりの人が卒へ遣入つて居るのを知らん顔で一人り  
生存へやうと云ふ量見が實は淺間しい然る仁と口を利  
くも汚らばしいと思つたから家内の者よ吩咐けて和郎と  
口を利せあかつたから和郎の量見んやア田舎の者の不實

仇 娘 好 八 丈

意だと思はしつたらうけれども子の眼よの和郎の身体が  
畜生よ見えたから然う氣が附いたら結構だ……サア皆  
赤口を利けと云たから忠八急よ忙しく成りましたさて訣  
別を告げて今度江戸表へ歸る時よは平氣だ捕まり度い所  
存ですから立派よ白晝歩行いて暮方宿屋へ泊つて朝の緩  
くり立ち澄アして歩行いて來るから却つて衆人も氣が附  
きません何事もあく江戸表へ着致し阿部川町の親父の處  
へ寄ると殿しい証議だから驚ろきまして 奥如何して  
來た 忠實の阿父さん斯様く 一伍一什を物語り是れ  
から南の傍番所へ驅込み願ひを致しますシテ見れば最  
是れがお顔の見納で座います 奥何うか然んな事を云  
はないで生存へて、呉れ 忠八エ往けません私も稍と人  
よ成りました親よ苦勞を掛け先立つ所ろの濟みませんが

仇 娘 好 八 丈

何卒堪忍して下さいますしと兩親へ譯別を告げるから留め  
 る事も出来ません此所で忠八の南の番所へ驅込み願を  
 致しましたたが夫れまでおつねもおくまも白狀を致しませ  
 ん忠八の行衛を証議が有りまして牢問よまで係ったが  
 白狀致しません玉井玄真の牢内で牢死を致しました木挽  
 の喜次郎長四郎の兩人の日光の普請よ就て往て居ました  
 が江戸表より捕方が向つて兩人とも召捕り入り牢でけ  
 すけれども肝腎忠八が出て来あいの中の調べが出来ませ  
 ん處へ忠八がお役所へ自訴出ましたから探るなくおつね  
 もおくまも獲らず白狀よ及び喜次郎長四郎も口を開きま  
 したから是よ於て愈々は處刑と極つた享保十一年の三月  
 引廻しとあり六人馬の首を並べました尤も彌太五郎源七  
 の白子屋の一條の餘波では座います一番端が彌太五郎源

仇 娘 好 八 丈

七二番目が木挽の長四郎三番目が同じく喜次郎四番目が  
 下女のおきく五番目が忠八六番目がおくま今年二十二歳  
 で座います其頃黄八丈の着物が大層流行ました夫れゆ  
 るよおくまの引廻しの時の身装の下へ白の綸子を着て上  
 へ黄八丈の振袖を着紙の珠敷を首へ掛け後ろ手ツ箇も縛  
 しめられて洗ひ髪の漬し島田では座い升見物が大層出ま  
 した今恰度日本橋まで往くと忠八の乗た馬丈けの鈴ヶ森  
 へ往きます跡の五匹の傳馬町へ引返しませ其の時よおく  
 まが振反つて忠八に向ひくま一足先へ往てお呉れヨ妾  
 も直ぐ往くから忠八早く來おヨとの問答を聞き數万の見  
 物が口々よ甲今處刑よ成るてエのに惚氣を云つてや  
 アがる乙美しい婦女だおア西此男と彼女と夫婦よして  
 遣れば斯んか騒ぎも出來めへよ惜しい事をしてなア杯と



仇 娘 好 八 丈

數万の見物だから種々言を云て居ます中又忠八の鈴ヶ森へ遣られて仕舞ひ五人のもの傳馬町の半内にて打首のうへ獄門より係りました時玉井玄貞の鹽漬にして刑に成りました白子屋の身上の關所も成りましたが庄三郎の七十の坂を越えて居ますから那處でも介抱人が座いませんで遂に野垂れ死に死んだと云ふ事で庄之助の阿父さん阿母さん姉さんの菩提の爲めとて髪を落して一文貰ひを致して彼方此方を歩行いて耻を掻たと云ふ是處でかつねの八丈島へ流罪遠島で座います何がしろ長命をした女で四十五の時遠島も成り七十五歳の時赦免よ成つて江戸表へ歸りました築地小田原町に三河屋善兵衛と云ふ積問屋が有ります其の仁の小供の時白子屋へ勤めて居ますたが右の一條も就いて暇を取りまして宅へ歸り

仇 娘 好 八 丈

出世を致し豪商く成つて居ます所ろがあつねの島から歸つて來ても引取人が無いから自分の爲め又の舊主人だと右の三河屋さんがあつねを引取り養ひつて置きましたがあつねの八十一歳まで長命して死んだと云ふ事では座います悪人の長命の餘り下さるん事で先是れにて白子屋の一條も結局と相成りましたへ退屈さま

仇 娘 好 八 丈 終

明治廿三年三月四日印刷  
明治廿三年三月九日出版

仇娘好八丈

版權  
所有

編輯兼  
發行者

日本橋區通四丁目四番地

內藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發行所

日本橋區通四丁目四番地

金櫻堂

